三省堂書店
發行所

291.37
N687ん

御來遊奉仰候

相州塔之澤
神代閣元湯

相州底倉温泉

環翠樓
鈴木
電話宮の下九番

梅屋魁泉
鈴木牧太郎
電話宮の下九番

国立国会
25.12.
図書館

219357

山高うして水清し絶美を集めたる函嶺の風色加ふるに豊富なる温泉の湧出を以てす歴史に謠ひ地理に吟ず天下の嶮箱根八里の語何ぞ夫れ詩的なる駒岳の奇峯早川の清流蘆湖の佳景は羽化登仙の思あるべく湧いて盡くる事なき温泉は多年の痼疾をも醫するを得べし三伏の炎熱の如き亦夫れ何かあらん

大正十二年六月廿五日

小牧實繁

例言

一、本書は、風景と溫泉とを以て天下に誇る箱根山を、研究的に通俗的に世に紹介せんとする趣意を以て起稿したるものなり、この地には從來諸種の案內記の類あるも、多く俗氣紛々たるものか、要領を得難きもの多かりしが、本書は主として學術上如何に箱根が價値ある地なるかを、世に紹介せんとする目的を以て作りし書にて、兼ねて遊覽の案內をも添へたり。

一、本書は、この地に精通せる學者が、各專門學より觀察して、この秀拔なる靈地の山水を紹介せしものなれば、普通の案內記とは自ら撰を異にし、最も有益にして最も趣味深きものなることを自任す、これを以て、この地方遊覽者が學術的の趣味を喚起し、遊覽以上に稗益するものあらば、本會の最も幸とする所なり。

一、本書は、本會が去年夏小田原に於て、第二回夏期講演會を開催せし時の講演を主として、これに新にこの山中の學術事項につき、特に必要なるものを加へ、又遊覽の案內をも添へ、この地の研究に遺憾なからしめんことを期せり。

一、本書は、左の如き分擔を以て、各專門の大家が起稿せられしものなれば、文體必しも一ならず、精粗其趣を異にせるものあるは、深く讀者に謝する所なり。

一、火山と溫泉	理學士	平林武君	
一、蘆ノ湖	子爵	田中阿歌麿君	
一、歷史	文學士	藤田明君	
	文學士	大森金五郎君	
一、動物	理學士	岩川友太郎君	
一、植物	東京帝國大學理科大學植物學敎室	牧野富太郎君	
一、文學	文學士	岡部精一君	

案內記、衞生保養地、旅行者の心得、順路に關する事項は此地方の地理に最も精通せらるゝ神奈川縣第二中學校敎諭佐々井信太郎君之を擔當し、藤田文學士多少の補修を加へられしものなり。

一、本書は、匆卒に成りしものにて、案內記の類は、猶補正を要すべきもの少なからずそは更に版を改むると共に、讀者の示敎をまちて其の誤謬脫漏を增訂し、以て天下の模範的案內記たらしめんことを期す。

明治四十三年七月

日本歷史地理學會委員

箱根

目次

遊覽案内

一　總説……一
二　湯本村……三
湯本…早雲寺…箱根養蜂所…玉簾の瀧…發電所…湯本茶屋…湯坂山…須雲川村…畑宿…山崎…新道…湯本細工…塔の澤…阿彌陀寺…發電所
三　溫泉村……二四
大平臺…宮の下底倉堂ヶ島…小涌谷…笹塚山…鷹巢城址
四　宮城野村……三四
木賀…宮城野…強羅…早雲地獄…二ノ平…碓井峠
五　仙石原村……三八
仙石原…大涌谷…乙女峠
六　箱根町外二ヶ村組合……四八
姥子…湖尻…湖畔の道…箱根神社…蘆ノ湖…元箱根村…蘆の湯…湯の花澤

双子山…駒岳…箱根關所址…箱根町…甘酒茶屋……七五
七　箱根の外輪……七五
明神山…金時山…三島道…施行平…山中城址…聖ヶ岳…湯ヶ原
八　箱根の物産……八四
箱根蘆ノ湖乘合船賃錢表…湯本停車場より各地への里程及賃金表
九　順路……八七
一、交通幹線との關係…二、國府津出發小田原經過…三、三島出發
四、御殿場出發
一〇　保養地と衛生……九七
一、箱根は如何なる種類の保養地であるか…二、温泉場の配布…三、温泉の性質及効能…四、入浴者心得…五、氣候及び温泉場以外の保養地…六、清遊の方法…七、保養の費用
一一　旅行の心得……一一五
一、如何なる研究資料があるか…二、觀察の順序と其方法…三、個人旅行と團體旅行と及びその費用…四、地文地質の觀察…五、標品の採集…六、生物學的觀察…七、史蹟探究

箱根の研究

一　火山と温泉……一三七
富士火山帯…火山のタイプ…箱根火山の外部の構造…箱根は二重火山…火口…火口壁…火口瀦…強羅…放射谷…早川…須雲川…中央火口丘…火口原…精進池…寶池…五斯噴孔…大涌谷…早雲地獄…硫黄山及湯花澤…小涌谷温泉…温泉の種類…内部の構造…熔岩…陥落火口…火山活動中心の變動…火山の變遷…噴裂…箱根火山は消火山である…蘆湖の變遷…火山の水平断面

二　蘆ノ湖……一七三
海洋研究の沿革…外國湖沼の研究…本邦湖沼の調査…調査の器械と困難…湖の照川…蘆湖の研究…湖面の高度…湖の面積及水面の形態…湖岸の風景…注入河…排水…深度…湖底の形態…湖棚…湖齢…水色…水の透明度…水位…既往の高水位と洪水…定常振動…瀬岸表層水温…深層水温…標式的熱帯湖の適例…結氷と水温四…局部水温成層異常…温層の傾斜…湖水の循環…水質…魚類…養殖事業

三　歴史……二三三
名義…箱根路…天下の嶮…中世の箱根路…江戸時代の箱根路…關所…箱根の山道…中世の關所…江戸時代の關所…關所の位置…關所の建…關所の通過…關所役人手形改…關所破り…手形御免…關所の位置…哀關

四　動物……二六九
獣類…鳥類…爬虫類…黒魚…かじか…あかはら…魚類…貝類…蝸牛類…蝦蟹類…昆虫類

五　植物……二七五
植物研究の歴史…植物名…理科大學の採集…蘆湖の水草…ヘコネを冠する植物…はこねこめつゝじ…はこねぎく…ひながやつり…からくさしだ…みやまにんじん…たてやまぎく…かなうつぎ…がんび…よしぐさ…ひめのかりやす…おやましもつけ…こいはざくら…のしゆんぎく…五葉あけび…いはなんてん…はなひりのき…すすき

六　文學……二九九
箱根の今昔…箱根の美…奈良朝…柿本人麿…平安朝…相模…大江匡房…源俊頼…藤原忠通…橘俊綱…鎌倉時代…西行…源實朝…寂蓮と顯昭…道家…爲家…阿佛尼…慶融…親行…家良…宗尊親王…後村上天皇…室町時代…宗久…太田道灌…道興准后…宗祇…宗牧…細川幽齋…徳川時代…徳川家光…箱根の詩…明治維新…木戸松菊…大久保甲東…伊藤博文

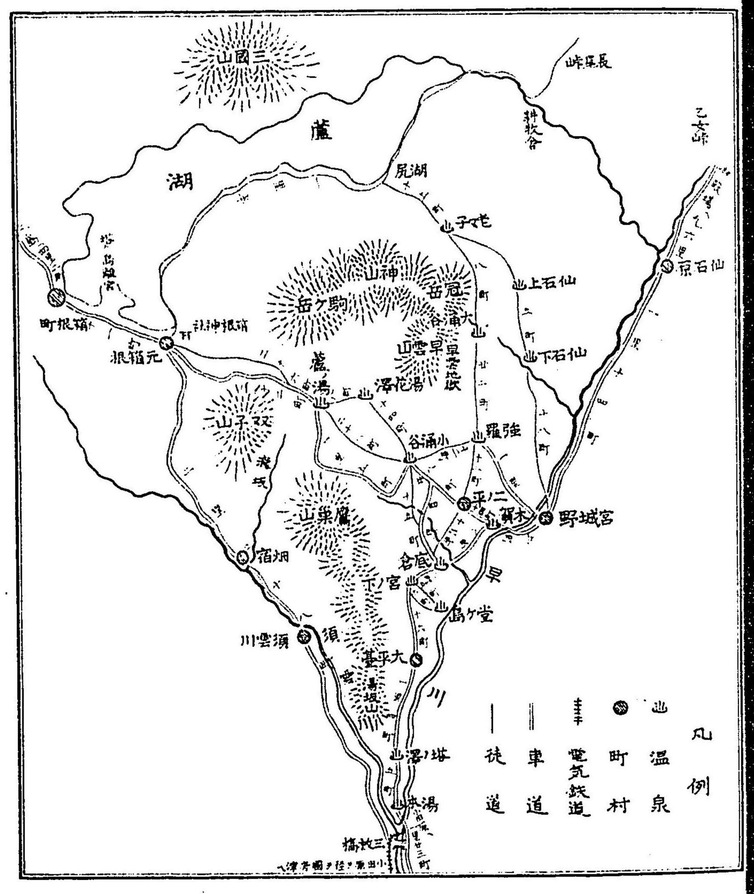
附圖

箱根及其近傍之圖　箱根里程略圖　箱根蘆ノ湖深度圖

寫眞版

酒匂川より箱根全山を望む・三枚橋より見たる湯坂山双子山駒岳……箱根街道より湯本を望む・湯本三枚橋……湯本早雲寺・北條五代の墓・鐘樓・庭園……賽之河原の石地藏・多田滿仲の墓・曾我兄弟及虎御前の墓……湯本發電所・塔の澤發電所……湯本茶屋・畑宿・舊東海道の現狀・樫木茶屋……湯本玉簾の瀧・須雲川初花忍の瀧・堂ヶ島太閤調の瀧……大涌谷・姥子溫泉……箱根離宮・塔ヶ島及び箱根町全景……箱根神社・石段・社殿と門……宮の下御用邸・宮の下全景・宮の下の景……堂ヶ島溫泉・宮の下溫泉……箱根登山用の椅子輿・關所址に於ける雲助會の一行……箱根關所通行手形・箱根關所判鑑……木戸孝允公の詩並に書……塔の澤溫泉・湯本溫泉・湯本旭橋の遠望……木賀溫泉・底倉溫泉・木賀底倉間の清流……塔の澤宮の下間の大平臺・箱根町杉並木・氷の張りつめたる精進池……蘆ノ湖の三景……箱根神社々前及び蘆ノ湖上に於ける日本歷史地理學會夏期講演會員の一行……箱根宿の景・箱根宿旅館に所藏せる大石內藏之助の名ある宿帳……早雲地獄……乙女峠より見たる富士・宮城野……蘆の湯全景・小涌谷溫泉

箱根里程略圖



箱根全山を望む　酒匂川より

三枚橋より見たる湯坂山・双子山・駒岳

「大丸ハ安い」
「大丸ハかたい」
郵便注文ハ
地方係ヘ
振替口座ハ
東京一五一五
商品目録書
送呈仕候
大阪
心齋橋
京都
松原通
祖戸
元町
名古屋
本町
東京日本橋區
大丸呉服店

諸先生方調剤所
和洋薬品・醫術器械各種
寫眞器械及材料各種
洋酒・滋養食料品各種
度量衡器販賣

小西本店
和模國小田原町幸三
電話小田原拾四番

▼本邦教育書の精粋八百巻を包含せる大文庫▲

日本教育文庫

全十二冊
紙數八千四百頁
一冊金貳圓
郵稅十二錢

評議員

文學博士　井上哲次郎君
文學博士　芳賀矢一君
文學博士　三宅米吉君
文學博士　辻善之助君
文學博士　白石正邦君

編輯主任
黒川眞道君

我邦上古より明治維新に至るまでの家庭教育・學校教育・社會教育・專門教育・家史百科等に關する有らゆる珍籍稀覯書を蒐集し、士農工商各階級の金科玉條を一部に大成したる大叢書・世界史上に燦然として異彩を放てる日本文明の精華は悉く收めて此に在り。全十二冊一冊約七百頁總計八千四百頁に達し收むる所の書籍凡そ八百卷の多きに上る。直接間接に教育に關係ある者は勿論苟くも日本の事を念とするの士は必ず之を備へざる可らず

收容書目

家訓篇　一冊
訓誡篇　一冊
女訓篇　一冊
學校篇　二冊
教科書篇　一冊
心學篇　一冊
宗教篇　一冊
遊戲及雜篇　一冊

東京神田神保町　同文館　振替東京一三五

新築落成　寝具清潔
原料新鮮　調理絶妙

塔の澤
開泉館一乃湯
……（電話湯本八番）……

◎弊館は樓前直下十餘丈の飛瀑二條ありて眺望佳絶なり
◎冬季は太陽を迎へて寒を知らず
◎夏時は涼風氷の如く暑の到るを覚へず
◎且別館には御客様の御無聊を慰し奉らむ爲め球戯場運動所の設置完備致居候
大方の各位一度御光顧の上御實驗の榮を賜はり度伏而奉懇願候

客室宏壯　寝具清潔
原料新鮮　調理絶妙

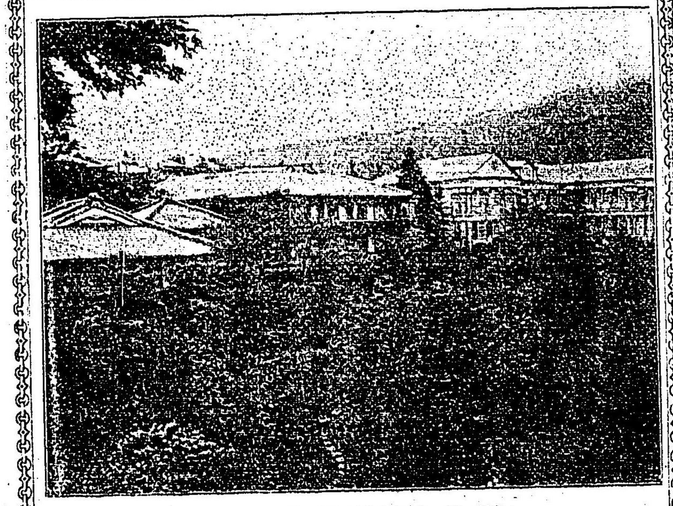
塔の澤
洗心樓玉の湯
——（電話湯本四番）——

弊樓には球戯所運動所の設備あり
浴室は御客様方の御希望に依り御貸切の便有之候
大方の各位一回御光遊の上御實驗の榮を賜はり度伏而奉祈上候

湯本玉簾の滝

堂ヶ島大関調の滝

須雲川初花忍の滝



（箱根奈良家旅館の全景）

箱根 宮の下 奈良家旅館

電話宮の下四番

（交通）

東海道國府津驛ヨリ電車ニテ湯本ヘ一時間湯本ヨリ宮の下迄一里半人力車通ズ

（位置）

壹千弐百尺ノ高地ニアリ山ノ中央ニシテ海抜宮の下ハ箱根

温泉

小田原名産
製造元

相模國小田原町
ちんとう本店
電話 五番 百廿番
振替口座 東京二三七二番
ちんとう支店
小田原電鐵會社前

水産學校 松原新之助君校閲
文學士 妹尾秀實君
鐘ケ江東作君
東道太郎君
共著

四六二倍判美裝三百頁
精密挿圖數百個
解說貳百六拾頁

東京本町
博文館
振替二四〇番

日本有用
魚介藻類書說

正價 金貳圓 小包 十二錢

あらゆる學校の必備書
教育者の參考書
趣味ある家庭の裝飾品

△本書記載の順序は高等動物より下等動物及藻類に終て其習性及漁獲採取の一班を詳說す
△本書の圖畫は專ら實物寫生に努め極彩色或はコロタイプ版を以てして精巧緻密を極む
△魚介藻類の名稱は平假名を用ひ之に學名を附し便宜の爲め普通使用の漢名をも附加せり

姥子温泉の効能

一各種の眼病、腦病、胃腸病、火傷、切傷、神經諸症

一當温泉は箱根町の西北隅に位し湖尻を距る十二丁の處に在り東南八丁餘にして冠ヶ岳大涌谷を控へ南西に蘆の湖、西北には仙石原の平原を隔て富岳を望み北には臺ヶ岳起立す

温泉は箱根全泉中一種類を異にす泉槽亦自然温度等一切人工を加へず無色透明なること水晶の如し

一浴鬱氣を去り座して富岳に對す神心自から活氣を生ず

特種の温泉優大なる風景、空氣の清澄自然に自然を加ふ他に温泉多々有りと雖も不及こと遠からん

諸賢來り一宿一浴の榮を給はらば幸甚

姥子温泉宿 秀明館

西村秀作

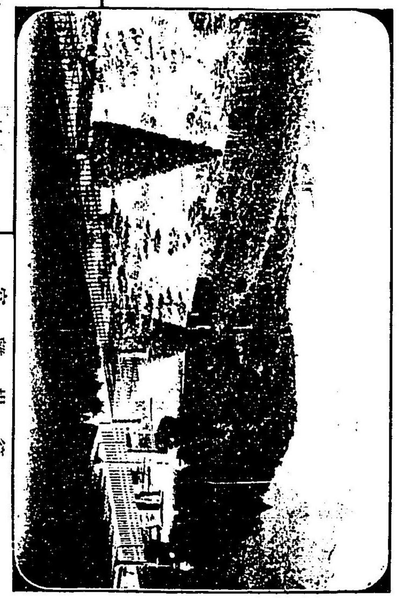
一浴清爽の時鈎を湖中に垂る是現世の仙、漁獲の魚類を食膳に供ふ是現世の樂、諸賢一試を給へ

姥子の四季

春は當附近の山櫻、湖畔の躑躅夏は蘆の湖畔に螢、中にも湖尻神宮山木の間隱の螢、湖上の螢、水中の螢、此處の螢の動作變化は萬伯のイルミネーシヨンも三舍を避けん。時は七月上旬より末に至る箱根の風景を語る者必ず一見を要す

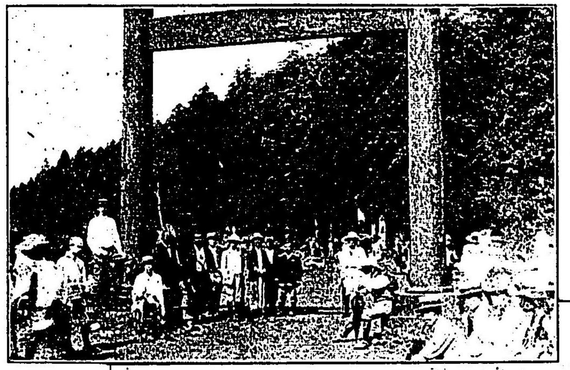
炎暑の候日中八十五六度を出でず好箇の避暑地秋は當温泉場附近一帶の紅葉即是此候晴天續き空氣清澄流不流を不問材料完備の時紳士淑女の清遊學生諸賢の修學旅行の好氣節冬は風流人士の雪見雪の箱根も好箇の雅題遊獵家諸士の活動の期且好適地

景全町根箱び及島ヶ塔



宮離根箱

明治四十二年八月擧行
日本歴史地理學會
夏期講演會



箱根神社々前に於ける一行

蘆ノ湖乘船及び湖上に於ける一行

相州箱根蘆の湯溫泉

遊仙閣

紀伊國屋

電話宮の下三番

國府津停車場より電車及俥の便あり三時間半にて達す

泉質は硫黄泉の効顯著至つて大なり球戲場の設備あり

箱根町蘆の湖岸

はふや

箱根ホテル

電話箱根三番

◀無比の消化力▶

新腸胃藥

（本品は粉末錠劑の二種にして各藥店に販賣せり）

發明品博覽會に於て
銀賞牌受領

公明正大なる內務省東京衛生試驗所は嶄然たる地位を占め其の試驗せらるる非結果間十三種の消化劑を比較試驗せるに本劑は異物なる混じ居る市場多くの「ヂアスターゼ」は特製に拘かゝはらず其の名り爲めに消化力弱し獨り弊社の「日本ヂアスターリン」は他に超絶の最力と強力との有る爲な博す然れども之れは澱粉消化に依つて有るのみならず乘るに此「ヂゲスチン」は獨り澱粉質中に含む蛋白質（動物植物）繊維菜肉類の大成分たる膠質（ゼラチン）腸質（牛乳等を胃に於ても並に乾酪（チーズ）共に消化吸收せしむる理想的消化藥なり所謂新發明無私なる陸軍々醫團雜誌第八號完全に消化する卓絶の効あるが故に小兒用藥として最も必要なり

岡崎研究所長曰く

一　本劑は左の適應症に効顯卓絶なり
二　消耗一般の胃腸病、虚弱者、腺病者、貧血者、妊婦、產褥婦、肺病、肋膜、神經衰弱、心臟病、脚氣、盲腸炎、赤痢、腸チブス其他慢性の諸病及總ての重病恢復期
三　營養增進の目的例之勞働者の體力
四　牛乳を消化する能はざる者

一種消化素比較試驗に微するも「ヂゲスチン」は最優等の強度を有す
尚ほ說明書軍醫團雜誌拔萃御申込次第送呈す

發賣元　東京日本橋區本町三丁目　合資會社　圓城商店

◉文部大臣　小松原英太郎閣下題辭◉
◉全國師範學校高等女學校長中學校教員等　二十數氏序文◉
佐村八郎先生著

日本品詞辭典

◉全壹冊四六判半截本金文字入クロース製美本◉
◉紙數七百餘頁◉選收語數三萬有餘◉定價壹圓郵稅六錢◉

特價二萬部限金七拾五錢

普通教育の精神に基き、普通教育の實用を旨として編したる本書は。純正公潔化に害なき語、日用に有要なる語學を選收せり從て他の古今一般の辭書の如くに、淫猥醜俚の語古雅死廢の語迂遠不急の語、分り切つた無用の語等は採らず、蓋し學生用辭書に根本的改善を加へたる者の第一書也、現文部大臣大に此趣旨を賛して特に題辭を給ふ、學生用辭書として未曾有の盛事也、尚ほ此書は品詞別に類排して文法學に便じ、解釋に洩漏を充て、作文に資し、檢索便覽を期して一語一行制を創出せる等、出色多趣の新著也、宜也、全國到處、好評噴々、各學校各聯隊は勿論、會社員、非務家、實業家等に、偉大なる歡迎と愛用とを受けつゝあり此際特價提供を以て、更に一般需要家の下命を仰ぐ。

見本送呈

入用者は郵券二錢を要す

發行所　東京市京橋區日本橋通九丁目　六合館書店　振替貯金口座東京一七二三

宮城町

見たる富士

乙女峠より

相模國小田原町

旅舘 小伊勢屋

（電話小田原四拾五番）

店前　電車乘降の便あり

塔澤宮ノ下間の大平臺

箱根町杉並木

池進精ためつり張の水

弊樓は早川の清流に臨み風景佳絶浴室
の美しきと調理御取扱ひの江戸式なる
とは粋人の知らるゝ處に御座候特に夏
季中は湯瀧の設も御座候御避暑御避寒
亦は一日の御清遊何れにも適し候

玉泉樓 新玉の湯

相州箱根塔の澤

電話特湯本五番

時代代表 日本英雄傳十卷の内新刊

山路愛山先生新著

西郷隆盛

上卷 正價七十五錢 郵稅十錢 下卷近刻

○五版 足利尊氏 正價五十五錢 郵稅六錢

○三版 源頼朝 正價九十五錢 郵稅十四錢

好評嘖嘖たる 和譯漢文叢書 第二編出來

田岡嶺雲先生譯

和譯韓非子

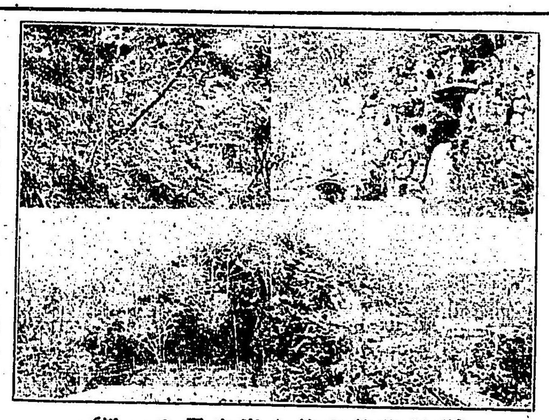
總クロース 全一冊 正價一圓 郵稅十二錢

古典の修養なき人の人格文章は多く淺俗の嫌ありと云はる。然れども其の甚だ晦澁難解なるの點は、他に亦大に學ぶべきものある現今の時勢に在りては、之に志ある者の一大障碍たらずとせず。今本叢書は漢籍原文の一字を易へず明瞭なる假名交り文に書き下し、且つ故事熟語及び幾多の章句に簡潔明晰なる註解を挿入せるものなれば讀者は普通の時文を讀むの時間と勞とを以て漢文特有の莊重典雅なる成語成句や簡古深奥なる思想の醍醐味を味ふを得べし。

發行所 東京市神田區雉子町 振替東京第七九九五番 玄黄社

相州箱根底倉溫泉

蔦屋旅館



（一泊探勝之栞進呈）

▲電話宮の下六番▼

——（蔦屋旅館本館と高山園の一部）——

△高山園（Rock-garden）の特色

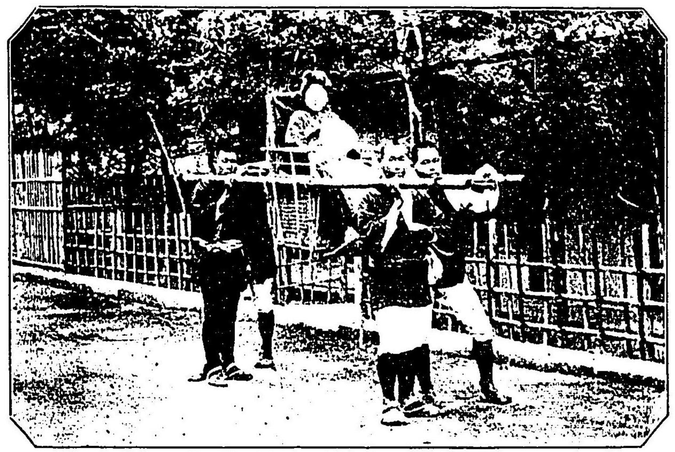
●弊館の屋後には運動場を兼ねたる數千坪の庭園あり高山園を設けて當山特有の高山植物を栽植しあれば賞花探涼觀楓看雪等低地には見られぬ風致を備ふ

△弊館へ來泊の道順里程

●弊館は國府津停車場（小田原をへて五里）松田停車場（道了山越し四里半）御殿場停車場（乙女峠を越へて五里）及び三島停車場（山中蘆の湯をへて七里）よりの四通路の中央に位すれば箱根見物の宿泊には至極便利也

△休日利用一泊探勝の便法

●午後新橋發車凡そ六時間にして其夜は弊館に泊り翌日小涌谷蘆の湯を經、箱根驛にて中食、蘆の湖を舟にて渡り姥子大涌谷强羅宮城野等を經、凡そ八時間にして弊館に回歸し夕氣車にて歸京せば僅か一泊にて箱根名所の粹を見物し旁々靈泉に浴し得べし



箱根登山川の椅子輿

關所址に於ける雲助會の一行

小涌谷溫泉は土地廣濶風景絶佳春は一と目一萬本の稱ある吉野櫻と共に四面に滿生せる諸種の岩躑躅其他にて四月初旬より五月下旬まで美花の絶ゆることなく、夏は避暑に適し、秋は紅葉に宜敷、冬は暖く四季總て適切の保養地なり

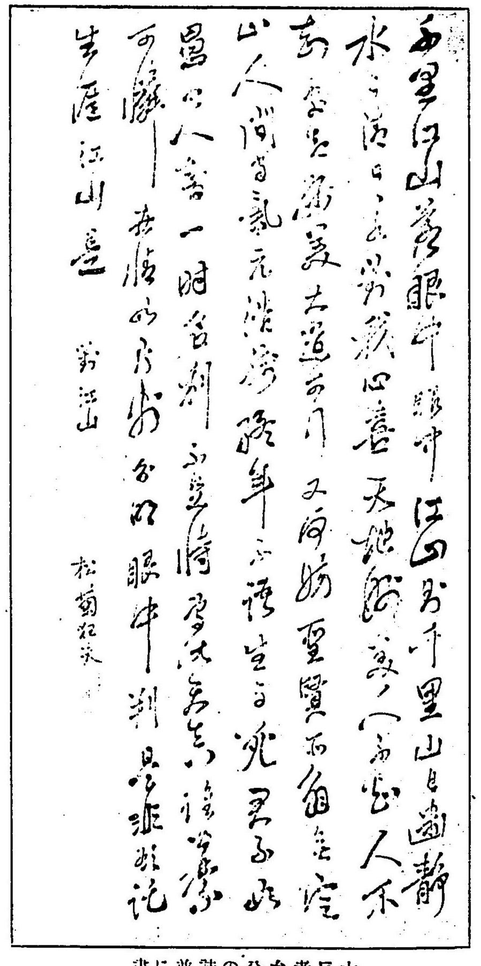
箱根 小涌谷（こわきだに）溫泉旅館 三河屋ホテル

電話宮の下五番

新橋より國府津まで汽車二時間内外、横濱より國府津まで汽車一時二十分間内外、國府津より湯本まで電車一時間内外、湯本より小涌谷まで人力車登り凡一時三十分、下り凡一時間

但し山路は車夫に御荷物を持たせ風景御覽旁々御歩行の方御興味多し

溫泉の効能は最も著敷、小涌谷は函嶺の中央故各地御遊覽に最も御便利、諸事大勉强仕御賄料低廉



木戸孝允公の詩並に書

相州箱根蘆の湯溫泉

鶴鳴館

松坂旅館

（特設電話宮ノ下七番）

（温泉効顯著名泉の單純硫黄泉）

（空氣地高新鮮）

相州箱根湖岸

獄影樓

松坂支店

（特設電話箱根二番）

富嶽湖面に反映し眺望の佳なる第一

當地は湯本より宮城野村を經て約二里箱根山中の一大仙鄕にして物價低廉學生諸君の避暑勉學に最も便利なり

箱根仙石大涌谷溫泉

仙鄕樓

上湯 石村菊治

下湯 石村支店

家庭百科

（新刊）

秦　政治郎先生著

▼全一冊　總クロース製　定價七拾五錢▲

子供を教育するには、どうすればよいてせうか、子供の悪い癖はどうすれば矯められるてせうか、といふことは、教師や父兄の常に注意せられる所てあります。本書は著者が二十餘年間に親しく調査せられた男女百人の性格について遺傳や習慣などを綿密に調べられた實驗錄てありまして、子供の性質を善くするに就いての參考書としては天下唯一この書あるのみてす。

東京日本橋區通三丁目十一番地　金港堂書籍株式會社

電話京橋一四五九番　振替口座東京九四二三番　金港堂書籍株式會社

心畫

石川松石先生著

一號、楷書用　二號、行書用　三號、草書用　各壹本金拾五錢

現時中等學校ノ習字ニ於テハ楷書ヲ主トシ行書ヲ從トシ草書ハ之ヲ課セサルヲ通例トス、然レトモ楷書ノミヲ學ヒテ行草ヲ學ハサルハ、恰モ平假名ノミヲ學ヒテ片假名ヲ學ハサルカ如ク、實ニ遺憾ノ事ニシテ、從テ楷書ノ外ニ行草ヲ學ハシムルノ必要アリ、然ルニ從來ノ行草ノ手本ハ、多クハ古人ノ筆蹟ヲ模寫シタルモノニシテ、其ノ筆法ノ如キ、初學者ノ容易ニ會得シ難キノミナラス、其ノ字體ノ如キモ、今日ノ實用ニ適セサルモノ多キヲ以テ、從來ノ行草ノ手本ハ、實ニ學校教授ノ缺點ヲ補フニ足ラサリシナリ、石川松石先生ハ、夙ニ此ノ點ニ着目シ、古人ノ筆蹟ヲ參酌シ、且ツ實用ニ適スル字體ヲ撰ミ、以テ行草ノ手本ヲ編成セラレタリ、其ノ筆法ハ、楷書ノ筆法ニ基キ、且ツ運筆ノ順序ヲ明ニシ、以テ學者ヲシテ容易ニ會得セシメ、其ノ字體ハ、實用ニ適スルヲ主トシ、且ツ變體ヲ避ケ、以テ學者ヲシテ誤ラシメサルヲ期セラレタリ、是レ此ノ手本ノ、從來ノ行草ノ手本ニ優レル所以ナリ、

新千葉縣師範學校教授　香川松石先生撰定　教科書乙種手本

定價

教科用			通信用
一、二學年	六錢	一、二學年	八錢
三、四學年	八錢	三、四學年	十錢
五、六學年	十二年五錢	五、六學年	十二年七錢

學校ニ於テ一括共用御購入ノ場合ハ相當割引シ上納可致候　實費希望ノ向ハ此際申込アリタシ　見本ハ郵券代用不苦候

製造發賣元　東京日本橋區通三丁目十八番地　森下町支店　電話京橋一四五九番　振替口座東京九四二三番　金港堂書籍株式會社

賣捌所　慶雲堂　秋葉和助　各地各國文房具店

理學博士 三好學先生
牧野富太郎先生 共撰

日本高山植物圖譜

本書に載する植物は數百種を網羅し圖は悉く實物寫生にして天然の色彩を施したれば何人にても實物と對照して其形狀、名稱等正確に知り得べし且其和名學名產地特徵等を和英兩文にて記せり

志村烏嶺先生著

一卷 價各貳圓卅錢
二卷 送料各拾貳錢

高山植物

採集及培養法

從來世間にては一般に高山植物は容易に採集及培養成し難き物として歡迎せられざるを遺憾として著者は實驗上の事實を述べて其の容易なる旨を說明せられたり

志村烏嶺先生著

價壹圓貳拾錢
送料拾貳錢

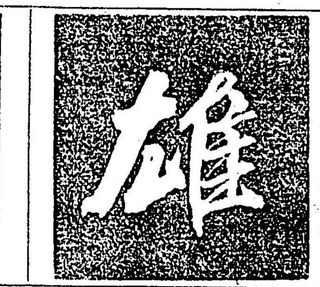
山岳美觀

本品は額面大の頗る精巧なるコロタイプ刷にして吾神州秀靈の山岳美とその間に點綴する高山植物の優姿とを示す物にして實に我國無二の最高尙品なり和英兩文の解說書を添ふ一輯袋入六葉宛縮寫見本は往復葉書にて請求あれ

一輯 價各壹圓
二輯 送料各拾貳錢

發行所 東京市日本橋區通三丁目十七番地 成美堂書店

◀綠陰消夏の好讀物▶



七月號 | 每月一日發行 | 定價一冊貳拾錢郵稅一錢五厘 六冊前金稅共壹圓拾錢拾貳冊貳圓拾錢

雄辯文學

新人月旦

日本海大海戰の敎訓 海軍大佐 小笠原長生
外交界の彗星 林毅陸
片面を認められたる御伽話 山上萬次郎
禪學管見 巖谷小波
人の性善なるか惡なるか 理學博士 近重眞澄
功過 文學博士 大村專精
根本は何れにありや 代議士 内青巒
吾輩の氣焰 松田源治
吾々書生時代 市島謙吉
露國現代の雄辯家 押川春浪
先輩を敬せよ 宮川船夫
當世名士の演說振り 法學士 失名氏
言論禁壓時代の實歷史 伊藤痴遊
盆栽たらずして大木たれ 代議士 竹越三叉
青年と辯舌 安部磯雄
都鄙の青年 幸德秋水
怪傑星亨 留岡幸助
河岡潮風

縱論橫議

名士の逸話

發行所 東京市日本橋區通三丁目十七番地 大日本圖書株式會社 振替東京二一九番

八月號要目豫告

東洋時論

八月一日發行　第四號　一冊十二錢　郵稅一錢半

青年の覺悟……社論
暑熱と學生……社論
美しき妻君……社論
豪宕浮競時代……竹越與三郎
新道德樹立の急務……鎌田榮吉
小學教員肺病問題……深甫
女子果して男子に劣るか……春洲生
文明國民と離婚……鳥山生
維新革命史論（四）……嘉木
歐米政界人物覺書（三）……永井柳太郎
女教員の懺悔……それがし
小說＝自白……ゴルギー

東京牛込天神町六　東洋經濟新報社

最良の論語講義

論語講義

總洋布美裝全一冊七百四十頁
正價壹圓八拾錢
小包料拾貳錢

五版發行

文學博士
根本通明講述

本書が幾多類書の間に介在するは宛も野鶴の鷄群に在るが如し堂堂として高く其地歩を占め常に萬目環視の中心點たり故に多年に亙りて彌々益々其光輝を發揚し今や學界無双の良書として一世の尊敬を荷ふに至れり此書もと博士の講義を速記して成れるものなれば述義最も明快にして親しく博士の聲欵に接するの感を與ふべきは之を言ふを要せず只茲に篤學者の一顧を乞はんとするは本書に用ひたる經文が隋唐以前の古傳本にして最正最古の者なること是なり今此經文に據れば版本論語に幾多の誤脫字あるを知るべく又誤脫本に據りて立言せる幾多の僻說あるを發見すべし故に本書の卷頭には特に古寫本論語の寫眞を掲げて其面目を躍然たらしめ卷末には古寫本論語考を掲げて其貴重なる所以を論定したり是亦學者の一讀を要する所なり。

發兌　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部　發賣　東京日本橋區本町　博文館

箱根溫泉

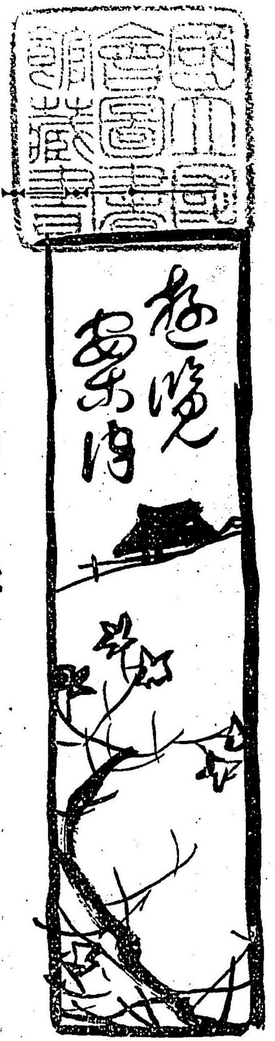
箱根溫泉場各地は風景絶佳、春は櫻花に宜敷、秋は紅葉に宜敷、夏は避暑に適し、冬は暖くして四季總宜の好保養地なり

箱根へは新橋、品川、神奈川橫濱及び平沼より湯本まで汽車電車聯絡一割引十四日間通用の往復切符の發行あり其發賣期日は七月一日より九月三十日迄、十一月一日より三十日迄、十二月二十日より翌年一月十日迄、其他は日曜大祭祝日の前日當日五日より翌年一月十日迄、其他は日曜大祭祝日の前日當日等なり◎湯本には人力車切符の發賣所あり

▲小涌谷（湯本より凡二里三十丁）松坂屋、紀伊國屋▲湯の花澤（湯本より凡二里）三河屋ホテル　蘆の湯（湯本より凡三里）花の湯▲姥子（湯本より凡三里）秀明館▲仙石（湯本より凡二里廿丁）上湯場石村、下湯場石村▲強羅（湯本より凡一里廿五丁）龜屋、宮内樓後樂館▲木賀（湯本より凡一里十丁）

以上の溫泉宿は御手輕專一に勉強仕候のみならず春、秋、冬は當地物價も低廉故特に割引仕候

箱根溫泉組合



箱根溫泉案內

一、總說

箱根といふと、山中の町村と思ふのが通例の樣に聞える。學術上からは無論山の全體をいふのである、又行政區域上では二縣四郡に亘つて居る、山中の全部と東南の大部が相模の足柄下郡で、東北の一部が足柄上郡で、是は共に神奈川縣である。西が駿河の駿東郡で、南の一部が伊豆の田方郡であるから、西と南の外側は靜岡縣である。併しながら多くの點から

見て、主要な意味のある箱根といふことは、山中の部分がそれであるから、大體に於て神奈川縣に配屬すると見てよかろう。それて外側の町村などは尤も關係のあるものは別として、大概之を省略して、主として山中の事を書かねばならぬ。さて山中の記事は、政治團體を中心として見るのが便利であるから、今此處に町村の數や部落との關係を概說して、それから各町村に亘らうと思ふ、全體山中の町村の數が七個で、人口は內閣統計局の發表によると、四十一年末現在五千六百四十三人である、それから部落にすると、凡そ二十餘りにもなる。全部が神奈川縣足柄下郡である。今各町村の人口と部落の配當とを表にすると、次のやうである。

湯本村	二一九五	湯本、湯本茶屋、神明町、須雲川、畑、山崎、塔の澤、
温泉村	一二二〇	大平臺、宮の下、堂島、底倉、小涌谷、
宮城野村	八一四	木賀、宮城野、强羅、二ノ平、
仙石原村	四九四	仙石上ノ湯、仙石ト ノ湯、
箱根町	六〇二	
元箱根村	二七六	元箱根村
蘆ノ湯村	四二	箱根町

此等の部落が、大部は早川本流の沿岸にあつて、その多數が温泉場であるから、日に月に繁昌して行く模樣であるが、一部は須雲川に沿ふて舊海道の往復頻繁であつた頃の宿驛であるから、漸くにして現狀維持である樣に見える、唯箱根町や元箱根は湖畔の風光の爲めに面目を更めてをる、今各地に亘りて管に町村の現狀ばかりでなく、附近の名勝古蹟の一斑を紹介しやう。

二、湯本村

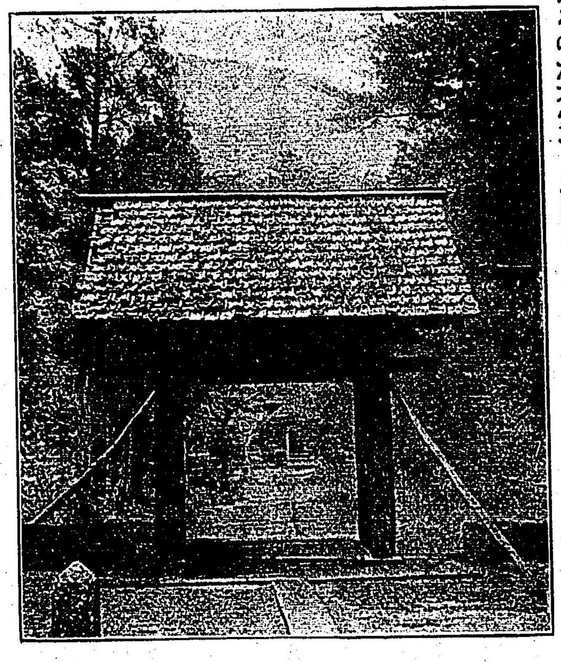
通常湯本といふのは、電車の停車場と温泉場との近傍の事であるが、政治區域は七部落三百戸で、人口二千二百人に達して居る、その中で有名なのは湯本と塔の澤とである。

湯本　湯本は早川本流とその支流の須雲川との合流點の周圍に跨つて居つて、河岸の平地と山麓の斜面とに少し許の高低を現はして居る。兩川の挟む處の山が湯坂山で、温泉はその南麓に湧出して居る、輕微な鹽類を含む單純泉であつて、無味無臭の透明泉で、湧出量が多くて、温度も近來發掘したのは可なり高くて、百廿度以上である。温泉旅館は福住と小川屋とで、中にも福住は萬翠樓金泉樓ともいつて、西洋館風でしかも内部は純然たる日本室で、早川の清流に臨み最も清楚を極めて、萬事の整頓してをること、湯槽の清潔雅麗なことは、箱根諸湯中で最も有名である、又現主九藏氏は二宮尊徳先生の高弟福住正兄翁(二宮夜話の著者)の嫡子であつて最も古い家柄である。小川屋は福住の西隣で又親切簡便である。何れも停車場に近いので、萬事が便利である。土地も低い割合に東方早川口の方に向つて開け、夏季の冷しき事は無論であるが冬季の温暖なことも、小田原に勝るといふ位である。附近に名勝舊蹟の多いのも随一て、舊海道から近い故でもあらうが、その來歴も古くて、七湯中最古に開け、既に鎌倉時代以前から發見されて、名士の來浴の記事が古書に見える。

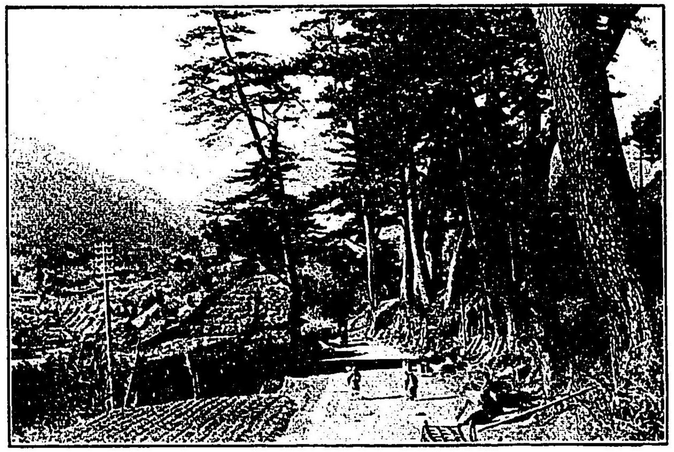
早雲寺　湯本停車場から福住橋を渡り、南に折れて須雲川を渡つて、小學校や役場のある處の南方の坂道を上ると、舊道に沿ふた湯本茶屋、それから東方に下ると早雲寺の門前に來る。此の間五町許。又神明町の三枚橋から舊道を上つても五町位、雪峰と落欵打つた金湯山の額面の掲げてある古風素朴の寺門、屋瓦特殊の雅趣が怨むらくは頽破に傾いて居る。直

く前面に見えるのが本堂で、庫裏がそれに連續して居る。唯、此の二棟が曾ては臨濟宗で、關東の巨刹であつた金湯山早雲寺の面影である。

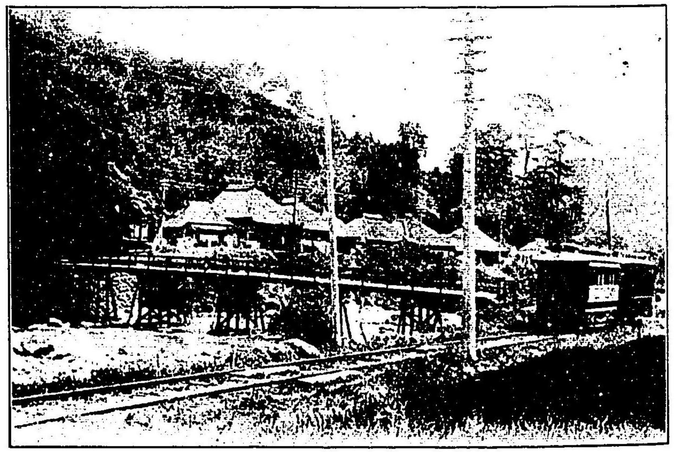
本尊釋迦如來・兩脇文殊普賢兩薩埵共に運慶の作だといふ、京都紫野大德寺の大隆禪師をば請待して、後北條氏二代の氏綱が建立したのであるが、早雲が小田原を占領した時に、此處で祈請し發願したのであるから、早雲を開基とするのである。その後に氏綱が經營して成就した、さて又後柏原天皇の御代に、獻金の事から天文十一年勅願寺となつた。今其の綸旨が傳はつて居る。永祿十二年武田信玄が小田原に侵入した時に、兵燹に罹つたが、氏政は之を再建した。當時關東の諸寺院で此の右に出るものがなかつたのである。其の寺域の如きも頗る廣くて、東西廿八町南北二十町、寺門が三枚橋の邊にあつたといふ。天正十八年豐太閤が小田原征伐をやつた時に、初め本陣を此に置いて、それから石垣山に移したのであるが、小田原が落城すると、時の住職明叟和尚は城内に居つたが、檀越の滅亡を傷んで、斷食して歿した。それから寺院も衰替に及んだのである。家光將軍の時再興せられたが、到底舊觀に



復することが出來ないのみてなく、維新以來益〻頽廢に傾いて、山門の礎石に雨水が泌ふ寂寞しい現狀となつたのである。併しながら往昔の名殘は種々の方面に存して居て、殊に傳寶たる處の綸旨は勿論北條五代の畫像の如き、歷史上得難きばかりでなく、現に早雲の像は國寶となつて居る。早雲容貌恠偉、實に我國の英雄たる相容をこゝに見る事が出來る、二代氏綱三代氏康の畫像も古いもので、よく其人と爲りを知る事が出來る。又本堂の襖の畫は、狩野元信の筆の龍虎である、就中その龍は頗る異彩を放つて居る。其他にも尙ほ元信下畫の名高い芦の模樣のある會席椀等數多の重寶がある。本堂正面から左に折れると墓地である。其の最上段の一部は、北條五代（早雲卽ち長氏、氏綱、氏康、氏政、氏直）の墓である。碑背にある彫文（文覺十二年八月十五日從五位下北條伊勢守平朝臣氏治再建）によると、現在の碑は再建のものであるが、少くとも氏綱氏康の埋骨の地たるに相違なかろう。その下段には、宗祇や今大路



箱根街道より湯本を望む



湯本三枚橋

渦木早雲寺

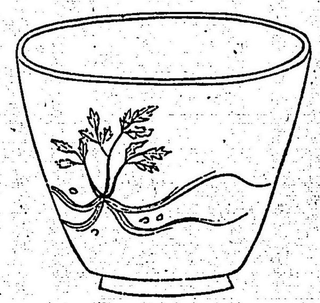
常木

鐘楼

北條五代の墓

庭園

道三などの墓もある、宗祇暫く此寺に住してゐた縁で供養の塔がある、道三は元和元年頃の幕府の醫師で、將軍入洛に隨つて京都に行き病に罹つたのに、江戸で崇源院が不例といふ事で、將軍の命を奉じて、急に疾をつとめて江戸へ下向したが、その途中で遂にこの處で、歿したので、其墓がある わけである。又本堂の裏側にある庭は、現今の造庭法と異つた趣のある庭である。本寺所藏の古文書寶物類は凡て左の如くであるが何れも歴史



研究上には重要なる材料ともなり、亦考古趣味のある者には、珍らしい參考ともなるものである。

宗祇法師畫像○北條早雲畫像(國寶)○北條氏綱畫像○北條氏康畫像○開山大隆禪師畫像○開山大隆禪師筆蹟二幅○天文十一年後奈良天皇勅書(開山大隆禪師號)○天文十一年後奈良天皇勅願所の綸旨○東海和尚の筆蹟○北條氏政密書○松花堂書狀○木下長嘯子書狀○北條氏政書狀○文和三年足利尊氏袖判下文○元信筆機織圖二幅○古文書一卷(氏綱氏政氏規等の書狀十二通)○清幹書狀○秀吉書狀○宗祇書狀○後陽成天皇宸翰○北條早雲書狀○土佐光起筆五代畫像○澤庵筆蹟○一休筆蹟○江月筆蹟○覺明筆大般若經○子昂筆醉杜甫○應擧筆山水○顏輝筆枇杷小鳥○周之冕筆水仙花○寧一山書○然可翁筆隻履達磨○雪舟筆羅漢○啓書記筆半身達磨○同出山釋迦○兆殿司筆文珠○探仙筆達磨龍虎○幻唐筆題林抄○櫻井基佐筆百韻連歌○朴南澗墨蹟○季吟筆詩歌集○松榮筆布袋杜子美○探信筆花鳥屏風○俵屋宗達筆菊花屏風○永德筆山水の襖○元信筆龍虎之襖○北條氏長寄附鐵鉢十五個○北條氏康寄附芦蒔繪椀十五個○今大路道三所持の藥匙○辨慶筆大般若經○芥納須彌一册○春浦錄三册

箱根養蜂所

箱根養蜂所

早雲寺から三枚橋の方に下ると、左側の道傍の上に新築の邸宅があつて、青柳氏の養蜂園を見る、邸内數十の蜂箱や、新案の大なる養蜂巣がある、和種もあれば洋種もあつて種々の研究が行はれて居る。養蜂家として全國有數の聞えがある。

玉簾の瀧

玉簾(たなだれ)の瀧

須雲川の南岸で、小學校の側から早雲寺への方へ上らないで、右の方西へ川に沿ふた道を行くと、凡そ三町許で、橋の向ふに瀟洒な一亭がある。明治二十二年東京の子安峻氏の開かれた彌榮館、通稱玉簾の瀧、庭内は開放せられて老幼士女來遊するものが多い。山麓から迸り落ちる清泉が、岩に激して數百千條の流をなして落下する有樣さながら簾のやうであるから、玉簾の瀧と命名された譯である。高さ二十二尺、巾二十尺水は溜つて池となつて、黑鯉金鮒などが悠々として泳いで、實に幽邃閑雅な景色で三伏の炎熱も爲に忘るゝばかりの思がある。湧出す

湯本村　一一

發電所

る源は、山腹が集塊岩であるから、地下水が幾多の罅隙を求めて現はれた次第である。

發電所　玉簾の瀧から續いて河岸を上ると、一町餘の處にある、數町手前から、既に轟々と遠雷の如き音が聞えて居る。舊海道からも下りる道がある。此所に立つて眼を湯坂山に移すと、半腹から鐵管が二條水源を須雲川の上流畑宿の下の溪に取つて、此處まで內徑三十吋の管で、延長千五百六十四間の間を引いて、貯水槽に入れる。是れから直下する落差六百六十尺、內徑廿四吋の鐵管を用ひて、水壓百九十封度が得られる。これを以てペルトン式水車四個千二百五十馬力を運轉して、七百五十キロワットを發電するのである。元と福住氏の發起で、明治廿四年に計畫し、廿五年に電燈を點じ、それから漸く發達して、廿九年から卅三年までの間に工費七十萬六千圓を費した。それが小田原電氣鐵道會社となつ

湯本茶屋
一里塚
旧我堂
湯坂山

たのである。今日では電車の外に、箱根及び箱根平塚間の電燈と、大磯て精米や活版等にも、電力を割いて居る。尙又この所の電氣を用ゐて湯本より更に山中に電車軌道の延長計畫が進行してをる。

湯本茶屋　の南方の岸は舊海道で、之に沿ふた部落は、湯本茶屋といふ。此處の南側に一里塚がある、それは東は風祭へつゞき、西は畑宿に接續する。入口の處は堂の前といつて、そこの正眼寺といふ寺內に假堂があつて、虎御前の祭つたといふ曾我の木像等、身大の坐像及びそれに緣のある傳來の種々の寶物がある。

湯坂山　湯坂山は又は城山ともいふ、湯本から塔の澤に向ふ新道の傍に左へ登る道がある、これから湯坂山へ登る。此の道は十六夜日記にある湯坂で鎌倉時代の箱根道といふ事である。今は唯、此處から蘆の湯への近道として知られて居る。元來小田原からの道でも、往昔は今よりはま

だ山腹を通つたらしくて、所々に其痕跡とも見るべきものがある、又箱根山中に入つては、谷底よりは尾づたひに通つたものと思はれるから、湯坂山は全く昔の街道筋に當つたやうである。登り口が少しく急峻であるが、數町登りさへすれば、廣濶な見晴して、山と海との景が双眸の中に入つて、舊東海道の陰氣なのと正反對である。頂きに少しく廣い臺があつて、濠の址とも見られるものがある、傳へて大森氏の持城であつたといふ事で、城山といふ。この山つゞきで蘆の湯へ到る距離は、新道を行くのと三と二との割て大に近い、唯一人の通行が稀なので、夏季は草が茂つて、分りにくいから困難である。此の山の南麓、殊に發電所から上流へ半里許りの間は、新緑滴る春の景色もよいが、中秋から紅葉の佳いことは箱根隨一である。

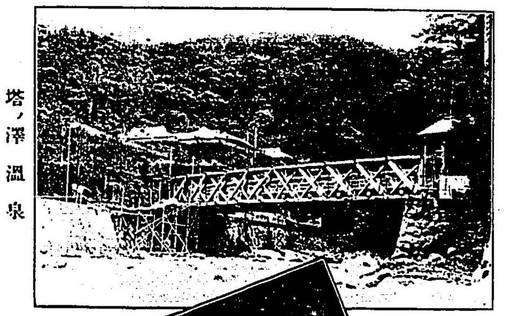
須雲川村　湯本から一里足らずて、川名と同じ名の須雲川村がある。

茶屋の婆さん頻に休憩を勧めるさまは昔の東海道を偲ばれる。此の邊の對岸湯坂山の山腹に一條の横線があるのは、發電所の水管の道であつて、その横過する處に一二の小溪があり、溪谷に沿ふて樹木の茂りの間に、湧泉が噴出して、瀑流となつて居る。そこに一棟の別莊がある、その一つの大きな瀑を忍ヶ瀧又初花の瀧といつて、盛夏三伏の候は冷涼な別天地であるが、一私人の有であるから十分眺を縦にする事が出來ぬ。初花瀧といふのは陳行勝五郎の小説から來た名で「行くや初花箱根山」といふわけである。須雲川の村を登り外づれると、川の左岸は少し廣い谷である。峯近くの谷の奥は急峻な峯となつて、鷹の巣山に續いて居るのである。峯を眺めると、柱狀や板狀の節理を現した熔岩が奇觀を呈して居る。その谷底は雨の甚しく降るときは瀧となるが、平素は乾涸して居るから、空瀧と云ふのてある。橋を渡つて道は左岸を通るが、少し急坂を上ると平

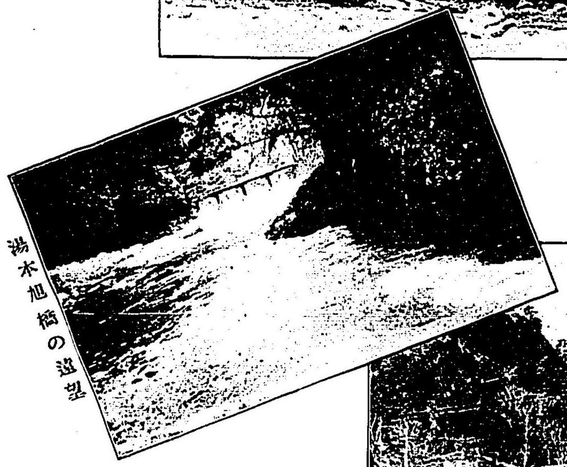
神代杉
[illegible]
畑宿
瀧坂
山椒魚

地がある。山麓を掩ふて居るのは火山灰である。その中で所謂神代杉を採掘して居る。現今山中で掘つて居るのは、主もに此の邊ばかりである。

畑宿　大澤川を渡つて又急坂を登る、須雲川から廿町で畑宿である。須雲川よりは多少見榮がある部落だが、何しろ舊道宿驛の衰微は已むを得ないのである。感心な事には、箱根山中にある舊宿驛は、各〻活路を求めて居ることで、湯本神明町から畑宿まで夫々箱根細工の製作が日を追ふて盛になる事である。宿の中央及び西端から一條の支道があつて、蘆の湯に通ずる捷路である。新道を早川沿岸に通れば、蘆の湯へ三里、此の道を採れば二里强である。坂の登りは廿二三町許、少し急なのが缺點である、道を登り詰めた左方谷底には飛龍の瀧がある。畑宿の村端から少し行くと、又々急峻な五町餘の上りである。此の南方の澤に入ること十町位な邊が山椒魚の名產地である。舊海道は東海道としては最短距

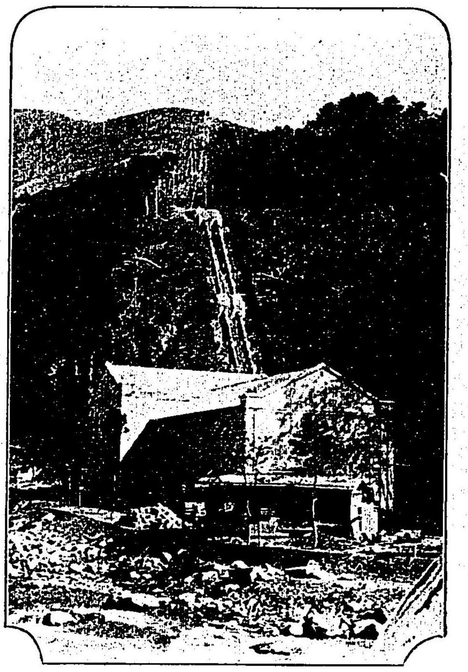


塔ノ澤溫泉

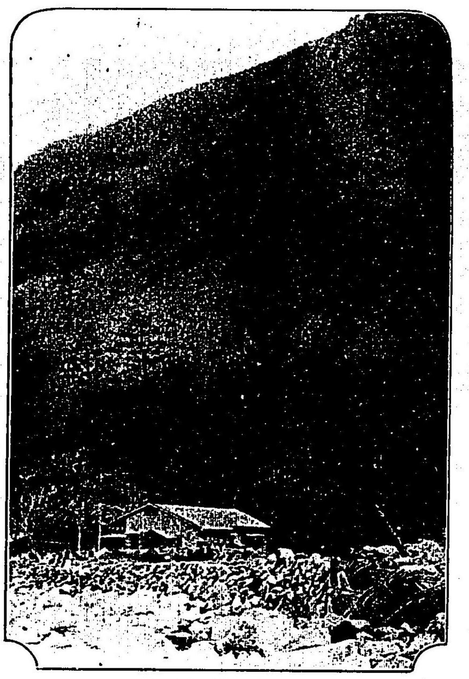


湯本旭橋の遠望

湯本溫泉



塔之澤發電所



湯本發電所

離の道路であるが、今は唯だ三島小田原間の地方人士の通るのと、山中の要用や、探究的旅行に用ひられる丈けである、通路の兩側には杉松等の巨木が並列して、寂寥の間にも一種の風致を感ずるのであるが、文明の進歩は此處にも影響して、三枚橋から西の方畑宿まで、唯だ二十九本を殘して去る四十一年は一千百廿三本を四萬四千圓で拂下げて、今は早や赤裸々の山道然たる果敢ない事になつた。街道の名殘はゴロ〳〵した敷石と、寂寞たる宿驛と、一里塚とである。

山崎　海道を三枚橋から東へ引き返へすと、道は丘陵を切り下げた處を通つて山崎に來た。此處は維新の際に官軍と小田原藩の軍との小衝突のあつた處である。維新の際に小田原藩の立場は頗る困難であつて、自然二派に分れた、始めは官軍に通ずることに定まつて居たものを、殉幕烈士の誘說によつて、浪士をかくまふやら、官軍に抗する準備やらをや

湯木村

つて居るのを、中垣上田などの名臣が之を聞いて、再び官軍に降ることとなつたから、俄かに浪士が逃れて、これに黨したもの等が湯本箱根を占領して、抗することゝなつたので、勢ひ藩士は戰はざるを得ない事となつた。山崎は其の最も激しく戰つた處である。無論浪士の敗亡となつて、伊庭八郎等は伊豆の方面へ走つたのである。この所から更に東小田原方面へ逆戻りして行くと、箱根の方を向いて左が天正十八年太閤の小田原攻に陣したる石垣山、今に城壘の址が歴々として殘つて、當年の雄圖を知る事が出來る。右には黄檗宗の長興山紹太寺がある、寛永十二年稻葉氏の開基で鐵手和尙開山の寺である。今昔日の觀はないが風景は頗る宜しい。但しこの兩地は湯本村の中でない。

新道　湯本への道は、三枚橋を渡らないで、山崎から直行するのである。元來溫泉場へ通ずる街道は、明治の初年までは駕籠か馬か徒歩の外なかつたのであるが、今は大道砥の如くとも稱すべきで、到底舊東海道の比ではない。是れ全く聖代の賜である。湯本塔の澤間は、明治廿一年九月に改修の許可となり、塔の澤宮の下間は廿二年七月許可である。それから宮の下箱根間や底倉仙石間は最近數年間に於ける開通である。全體此の新道は、舊海道よりも風景がよくて、趣味があつて、唯今では人馬車籠の通行の頻繁である上に、益々近時發達する處の溫泉場を縫ふて居るのであるから、舊海道よりは愉快で淋しくなくて、殊に其の風景のよい事は、蘆ノ湖畔と此の沿道とが、箱根中で粹を拔いて居る。それで此處を通つただけで、箱根の一部を會得した事になるのである。先づ湯本の景から初つて、箱根溫泉中の風景第一てある塔の澤から、歩々に變化してゆく。早川火口瀨の活畫圖は、自分の力では今茲に書いて見やうといふ勇氣が出ない。

湯本細工

塔の澤

湯本細工

湯本細工は挽物指物漆器等で、今は箱根全山到る處に土産物として賣つてをる、併し元はこの地が始で既に後北條氏の頃にあつたもので、元龜元年九月に湯本で御番細工をなすべき由北條氏から番匠に命じた事があつて、他の地のは、この所から習つたものである。昔は規模も小さく茶盆・膳・椀の類に過ぎなかつたが、今は技術も進み山中より發掘せらるゝ神代杉など應用して、中々精巧なものが出來る樣になつた。

塔の澤

湯本から早川に沿ふて新道を僅かに五町、徒歩でも十分足らずの處であるが、早川の溪流は漸く其の佳景を表現して、溪谷が漸次幽邃を加へて來た。河はs字形に屈折し、道は再び河を渡つて右の方南岸を上る、そのs字形の處に塔の澤の溫泉場がある。北の山は塔の峯、南の山は湯坂山、兩方から相迫つて全く山中の別天地に入つた心地がする。それで實は幾らも上りになつて居ない。狹長な谷間を照す太陽は、夏の

冥盛にも涼しくて、東に開けた谷底は、冬の雪にも暖かい。山水の調和は、箱根諸湯中の白眉である。交通の不便な昔でさへ、湯本に近いから、名士雅客の訪ふ處となつて、幾多朝野の騷人中にてはやされた所である。彼の朱舜水がこの所を稱揚し、水戸の義公が驪勝山と名づけたといふが、試みに十二湯を巡回して見ると、實に古人の稱揚も首肯せられるわけである。無味無臭の稀薄な鹽類泉は、清澄で水量か豐かで、是も亦客を引く大なる力を以て居る。旅舍は總じて五軒で、入り口から順序に記すと、新玉の湯・玉の湯洗心樓・鈴木環翠樓・一の湯・福住それ〳〵特色があつて、學生・商人・紳士夫々の種類の人の要求に適つて居る。中にも環翠樓は神代閑と稱して、故伊藤公爵も屢遊ばれた旅館である。

阿彌陀寺

序に附近にある散策の地を書きつけると、先づ第一に塔ヶ峰である。山は明星山の連峰の一であるが、頂から三分の一は草山で、

中腹以下は鬱々たる森林である。温泉場からは十八町(實は十四五町)で一宇の寺院がある。阿彌陀寺といふ、淨土宗である。少しく上ると寺門があつて、阿育王山の額面が掲げてある、開山は久野の惣世寺と同じく、安叟和尚である。慶長年中彈誓上人の中興に係る、山中に上人籠居の岩窟がある、この上人はこゝに籠つて難行苦業をなし、大に人の信仰を得たやうでである。この上人の事は羅山文集にも見えてゐて、塔の澤の地に僧有り五穀を食はず、夏冬唯一葛一衣沐せず浴せず髭はず爪らず、年三十二常に鐵杖を杖き鐵履を着し、嶮岨を行くこと平地を走るが如し。無量壽の佛號を書して光あり、信者往來絡繹といつてをる。寺は頗る閑靜で、登道は樹林のトンネルで、夏時の綠陰散歩に恰好てある。

寺は今荒廢してをるが寺寶が多い。

傳聖徳太子作摺袈裟地蔵〇同製首面相〇傳惠心僧都作三尊彌陀木像〇彌陀黄金佛〇傳陳和卿

作吉祥天銅像〇傳其辨僧都作不動像〇傳空海作辨天像〇傳祐天僧正等山越彌陀像〇彈琴上人感得肉身蛭形辨天像〇同上佛舍利〇同上光明名號〇同上十三光佛〇同上手澤珠數〇同上鍍杖鐵履

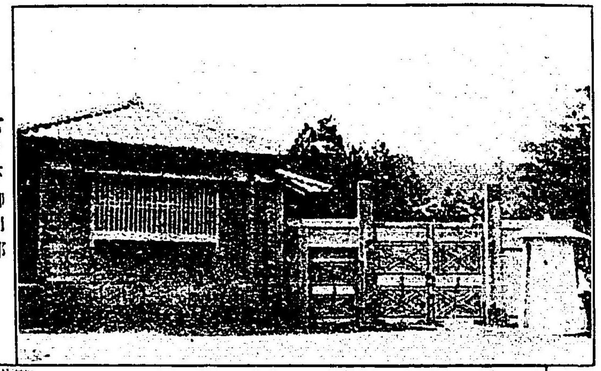
發電所　次が發電所である。塔の澤の村を端まで來ると、對岸の山麓字臺ヶ岳に洋風の一屋あり、橋を隔てゝ百雷の轟きがする。箱根水力電氣會社の發電所である。百廿萬圓の資本を以て、卅九年の創立て、横濱市の電燈に使用せられるのである。塔ヶ峰の中腹から落差七百廿尺、内徑三十吋の水管一秒時八十六立方尺の水壓力を以て、獨逸ホワイト社製のペルトン式水車三臺(外一臺豫備)を動かして、一臺について二千五百馬力を働かして、二千キロボルトを發電するのである。發電機にはアメリカのゼネラルエレクトリ會社の製造で極最新式のものであるといふ。水口は早川の上流宮城野村の大束からて、實に一方五百七十九尺の延長を引用したものである。

温泉村

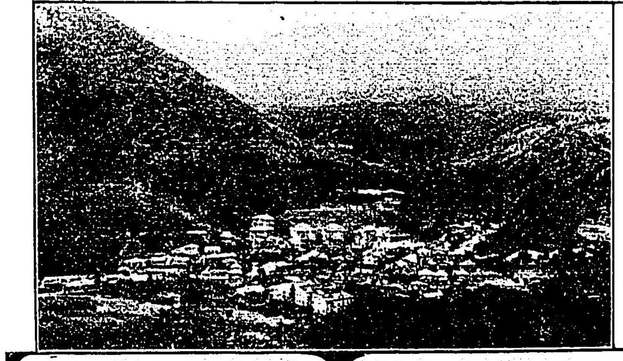
三、温泉村

大平臺宮の下堂ヶ島底倉は早川に沿ぶて居るが、小涌谷は支流蛇骨川の谷である。當村は箱根諸川の中心である、塔の澤から大平臺まて一里、大平臺から宮の下まて十四五町、間道を通れば數町近くなるが、風景を無にすることになる。先づ大體に湯本から一里廿町で、此の中心に來られるのである。その間早川溪谷の勝景、火口瀬浸蝕谷のつゞら曲りの沿道、數丈の谷底を奔る清流は、急湍となり瀑流となる、谷又谷の幾多の變化、四季樣々の植物、蘚苔小草、去る能はざる趣がある。

大平臺　沿道一里、人家がない處を登つて行くと忽ち富士見亭といふ小舍がある。此處の前に立つて西を眺めると、數個の谷を隔てゝ芙蓉の峰がヌット突き出てゝ見え、思はず快哉を絶叫するのである。此の茶店

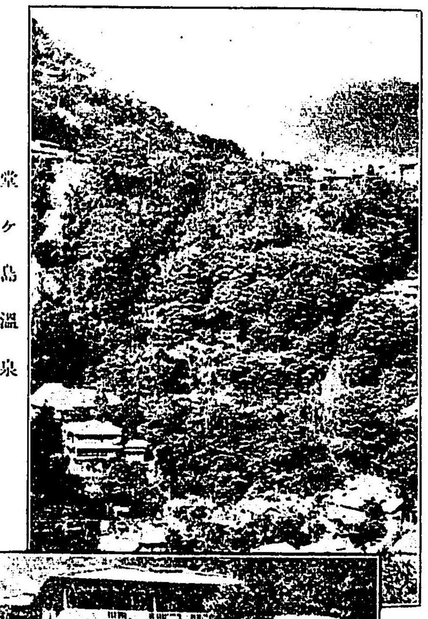


宮ノ下御川邸



宮ノ下全景

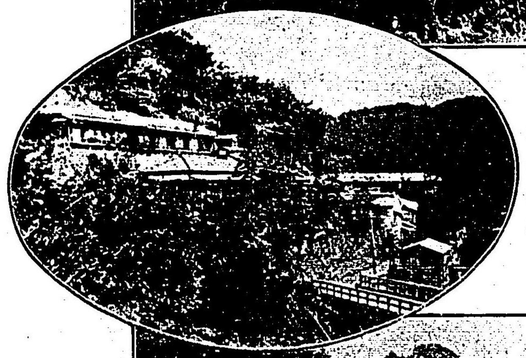
宮ノ下の景



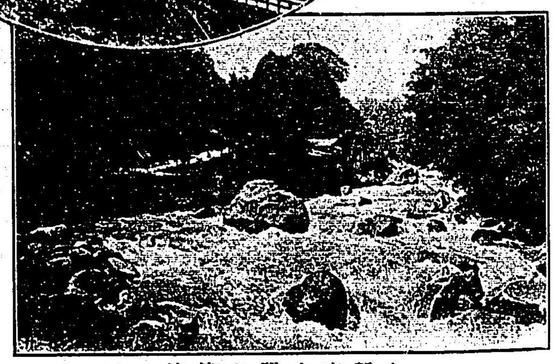
堂ヶ島温泉

宮ノ下温泉

木賀温泉



底倉温泉



木賀底倉間の清流

から少しく上ると、大平臺の農村である。集塊岩の削られた臺地である。茶店や、箱根細工や、箱根水の製造所や、農民の部落がある。此處を過ぎると、再び峽谷に入るが、そこに石切場がある、道の上にも下にも露出して居る。

宮の下・底倉・堂ヶ島　三部落は別々の團體をなした部落とは考へられぬ、人家櫛比し、或は連續して居る。元は全部底倉といつたのである。宮の下と底倉とは僅に道一つが境である。底倉は蛇骨川を隔てゝ渡つて居る、堂ヶ島は宮の下の崖下につゞいて僅かに下りた處である。此の中で宮の下はその中心である。此の地全體に外輪山を破つた早川火口瀬の浸蝕した谷の斜面地である。淺間山といふのはその外輪山の一部で、火口瀬の盡きた處である。川を渡ると明星山である。淺間山の山麓に湧出する溫泉は頗る多く、蛇骨川の如きは其の河壁に何ヶ處となく噴出し、

て居て、八千代橋から下を覗くと、二三ヶ所も蒸氣の噴出する處が見える。

御用邸

宮の下は文政の頃の弄花の七湯枝折に、四十戸四五町のみとあるが、元來底倉の湯も隨分古く、底倉記といふものに、應永十年の昔、脇屋義治の男義陸が、陸奥から來て、木賀彦六方に潜伏して居たのを、管領の命によつて今の富士屋の祖先たる安藤隼人が討取たといふ記事が見える。この事は鎌倉大草紙にも見えて確な事であらう。又底倉記には、義陸が温泉に入つたと見えて居るから、とにかくその頃から、湯は開けて居たものと考へられる。後北條氏の時、天文十四年湯治場禁制が令せられて居る。又天正小田原攻の頃にも、士人の往復があつたらしく、殊に伊達政宗が參陣のときには、一時此の地に居たやうである。德川氏の時から、引物細工は其の名産であつた。宮の下と底倉との間に御用邸がある、御

建家は日本造でお庭は中々廣い。明治二十八年に落成したので、爾來年年竹の園生のやんごとなき方々の御避暑遊ばされることになつてをる。湯屋も大厦高樓を並べて、其の繁榮箱根第一である。それから湯は鹽類泉で無味無臭で、底倉は最高溫て百四十度のものがある。順次高低の湯槽が設けられて、適宜の溫度のに入られる。中心地たる宮の下は最も繁昌して、溫泉旅舍の外に、外國人向の骨董品等の大なる商店、雜貨店、寫眞屋、名物自然薯煎餅を賣る菓子屋、挽物屋、遊戲場等がある。又こゝには浴舍奈良屋の構內に郵便電信局電話所もある。

旅舍は、宮の下に富士屋、（電話宮下二番）奈良屋、（電話宮下四番）龍雲館、（電話宮下十二番）底倉に萬屋、（電話宮下六番）梅屋、（電話宮下九番）仙石屋、（電話宮下十番）大和屋がある。この中富士屋は此の地の舊家であつて元と此底倉一帶を領して居た家である。今この旅館は會社組織である。主として外國人向の樣であるが、建築も和洋折衷で、輪奐頗る宏大雅麗、

大廈高樓驚くばかりである。料理でも、東京横濱にもない巧な料理が出來る。奈良屋は和式の高樓と西洋式の大廈とを有し高尚な紳士向の旅館である。明治六年には　陛下御臨幸の榮を辱うしたので殊に有名である、遠く相模洋の白帆を望み、淺間明星嶽を眺めて、風光絶佳である。其他の旅舍は、普通客に適して居ると思はれる。その中で蔦屋は茶代廢止をやつて居る、この家の裏には太閤石風呂といふ不思議なものがある。涵琴樓と稱して設備がよく整つてをる。又其庭園は後の山腹を利用して作つたもので、高山園と稱して凡そ一萬坪の廣さがある、こゝへ山中特有の高山植物を移植して、四季の眺めに適するやうになつてある、この目の下は蛇骨の清流あり、飛瀑あり、遠く淺間明神等の諸山を望んで風景頗る宜しい。又宮の下龍雲館には太閤湯あり。底倉梅屋は魁春樓と稱して風景よく、仙石屋には吹上げ湯がある。堂ヶ島の近江屋、大和屋共に早川の

明星山麓

夢想國師の址

富士見茶屋

清流に臨み、幽邃閑雅にて、俗塵を去ることについては、箱根屈指である。又底倉には宮の下底倉木賀等の浴舍に點火する電燈の發電所がある。散歩探勝の地は、又附近に少くないが、渓谷に沿ふた山水が隨一である。沿道の勝は此處に略して、特殊の名勝舊跡を記すと、明星山麓に眺望のよい熔岩臺地がある。堂ヶ島から河を渡つて登つて行くと數町東で、宮の下附近の全景が眼に入る。其の廣場には弓を射たり、野球をやつたりするのに便利である。東方の崖には凝灰岩が露出して、石切場となつて居る。堂ヶ島には二三の名所がある。一は丸山の白絲の瀧である、山は部落の東の小丘で、瀧は極小いものである。又小山居山の小丘の上にある古碑の址は、往昔夢想國師が方九尺の庵室を建てゝ閑居した處だといふ傳説がある。宮の下から堂ヶ島に降りる道の急流に、葉陰の瀧といふ名を與へて居るものがある。宮の下の南方は湯坂山の連峯淺間山である、

蛇骨野

早川はその北麓を流れるが、溪流が早川に直下して瀧となつたものは幾つもある。沿道の南側、即ち登り道の左側に築き上げた石垣の高大なのは、富士屋別館の建築される處て、富士見臺といつて、此處數年來造園の進行中である。小涌谷に行く道は、底倉から、御用邸の東南側から左に折れて上り道がある。それを二町許り行くと、村端から僅て谷が廣がつた樣に思はれる。斜面地であるが此邊から一帶を蛇骨野といふ。蛇骨川が築いたものである。此處に湯の花が沈澱して、その中へ木の葉が混入して、相重なつて層をなした印痕を留めて、木葉石を作つて居る、その層の色は灰白色である、これを蛇骨石といふ。その層の端が新道を掻き崩した處にも露はれて居る。こゝから遠からずて新田義陸の爲めに立てた一碑がある。

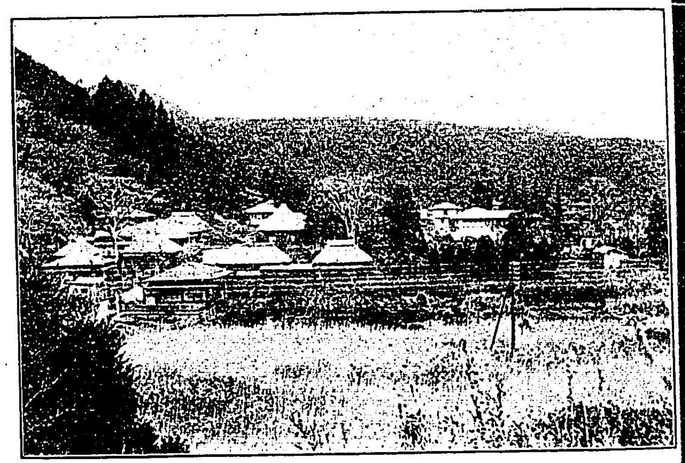
新道は小涌谷へ行く、舊道の一つは右に折れて二ノ平へ行く、底倉から

此處まで十三町、眺望が漸く廣くなつて來る。地は正に一千八百尺である、此處から北へ行くと、木賀へも行けるが、順路は南へ五町で小涌谷がある。若し底倉から新道ならば、三十町位である。車は無論此の方てなくてならぬ。

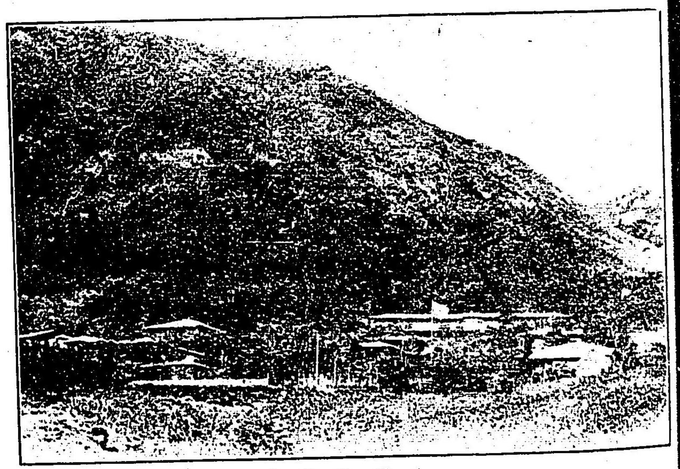
小涌谷　小涌谷は神山の支峰小地獄山の斜面地て、早川や蛇骨川の谷底を遙かに見下して、誠に濶やかな眺めてある。小地獄又は小涌谷といふのは、溫泉場から六町餘の上の谷に、硫黄氣を噴出して居るからの事て、元とは唯、小地獄といつたのを、明治六年　陛下宮の下へ行幸の節、福住正兄翁が如何にも酷だしい名といふので、主張して小涌谷といふ事になつたといふことてある。溫泉場が出來たのは、明治十六年に横濱の榎本氏が此地を買つて開鑿し、小地獄の噴氣孔から熱氣を導き來つて浴舍を開いたものてある。多量の硫酸礬土を含んだ酸性收斂泉てある、噴氣

孔は今は頗る沈靜に近づいて、硫黄の出るのみである。溫泉旅舍は二つ、三河屋と開化亭とである。三河屋は鳳來樓と稱して、榎本氏の經營である。和洋の客の望に應ずるやう設備が十分行屆いて、庭園も廣く樹木の配置宜しきを得、浴室も多くて、更に遺憾のないやうに出來てをる。開花亭は三河屋の支店である。附近の名勝は千條の瀧といつて、一二町蛇骨川の方に下りた處にある小瀧である。此の地の散策の良地は水てなくて山である、溫泉場から西南を見ると二個の小山がある。北のが出山て、次のが笛塚山である、東の方のは淺間山で、東南のが鷹巢山である。更に北方南方に明神山が見える、西には双子山があるが、筋を曳く價値のあるのは笛塚と鷹巢であろう。

笛塚山　小涌谷から新道を行く間に、細き間道は幾つもあるが、十町許り行つた處で、右の方即ち西へ出山と笛塚山との間を上る支道は、蘆の湯



蘆の湯全景



小涌谷溫泉

への提路である。此を行つても新道を行つても、笛塚山の上は臺地であるから、理なく行くことが出來る。此處は新羅三郎義光が奥州下りの節に、豐原時秋に笙の秘曲を授けた所であるとの傳説がある。併し此事は、當時の足柄街道と離れてをるから少々疑問であるが、口碑はかく傳へてをるのである。ともかくも眺望が開けて開濶なる風光は他に求むべからざる爽快な感がする所である。

鷹巣城址　小涌谷から湯坂山へ通ふ山道を登てもよし、又新道の笛塚山の邊から上つてもよい、頂は二千七百六十尺の地であるが、附近が既に高い處であるから、大した登りてないばかりてなく、蔭の湯からは殆んど上りではない。此の頂に二三町歩の平地がある、能く注意すると、一二ヶ所に堤の如きものが見える。是れが卽ち鷹巣城址である。築城は何時の事であるか分からぬが、豐公の小田原征伐の時に德川氏の手勢が

之を陷れた事は間違ない。それが湯坂山から蘆の湯へ行く古道は、此の頂上を通つて居るのである。此の山の南麓は恰も瀧坂になるのである。

四、宮城野村

底倉の中央から十町で木賀、それから四町で宮城野、それから一里で強羅、是れに二ノ平を加へて、宮城野村が成立つて居る。往時は宮城野と仙石原とは、足柄上郡に屬して居た。底倉から木賀へ來る間に、漸く溪谷が淺くなつて、木賀の邊では河底と道路との高低が殆んど無い樣になつて、風景の趣が頗る變つて來る。

木賀　木賀温泉場は、何時から開けたかは、不明であるが、豊臣氏の頃に既に知られて居る、慶長の初めに徳川の部將が湯治したといふ事て、當時は宮の下と競爭的に繁昌して居つたが、大火災に遭つて以來、

大に衰へて、現在旅舍は龜屋と仙石屋との二戸となつて居る。温泉は鹽類泉で、百度位、温泉場の風景は頗る幽邃閑雅であつて、早川の流れは、巨岩に激して玉と碎け、岸の紅葉は之に錦を織るといふ姿で、秋の景が最もよい、春夏といへども、塔の澤の幽邃に及ばぬが、他には此處に及ぶ處はあるまい。或は宮城野の薄に轉ぶ露の玉、新緑を縫ふて囀づる鶯を聞く夏の景色も、他にては聞かれぬ價値がある所である。

湯場の西の臺地には、東西半町、南北一町位な城址がある。唯一塹跡のみてあるが、豊公の小田原攻の時に、徳川の旗下松平康直が佐野から宮城野へ侵入して、之を陷れたものである。今尚ほ本丸二九の名を殘して居る。此の丘陵を城山といつて居る。

城山(城址)

宮城野　宮城野は、一望平坦な耕地を以て充ちて居る。住民の大部は農業林業である。此の平地は學術上其の成立から火口原である。太古は

宮城野

蘆ノ湖が此邊まで廣がつて居たのであるが。後に平地となつたのである。

村の東南部には埋れ木即ち神代杉を發見することがある。村は多くは河の左岸にあるが、右岸の橋の本の茶屋には、有名な宮城野蕎麥を打つて喰はせる。都人の口には適ふか否やは知らぬが純粹の生蕎麥である。

強羅　強羅は宮城野て河を渡らないで、西南の方へ左手に登り行く大道を凡そ一里、間道は處々にあるが、細い山道てある。此處には下湯場、後樂館といふ湯屋一軒、上湯場早雲館は散歩者の休憩場てある。その他附近は一帶に枯野の斜面てある。西方を臨むと早雲山、北から東へは明神山から明星山、その麓に早川の谷がある、その近傍の切り拓いた平地には、湯の花を沈澱せしむる池が數多ある。湯は早雲地獄の系統に屬して、高溫な酸性泉てある。土地の高燥閑靜なのと、湯の花多くてこれを輸出するのとて知られて居る。

早雲地獄　早雲地獄は强羅の西に接續した早雲山の麓の燥裂口の名である。强羅から約半里の山道を上ると、小涌谷の樣に草木枯死した岩石の白灰色の谷の底てある。もとは水蒸氣や、硫黄やを噴氣して居たのであるが、今は全く閉息して居る。去る四十年八月廿四日の大雨の時に、山崩を起して、十町から砂礫を推し出した。湯の花澤から大地獄へ通る山道は强羅から來るより便利てある。

二ノ平　二ノ平は行政上宮城野村に屬して居る、底倉から來れば十三町、宮城野からもそれ位、强羅からも十五町位、二ノ平からは底倉、宮城野、小涌谷、强羅へ通ずる樣になつて、若し平野ならば、交通の要衝て、盛んになる處てある。土地は火山灰の掩ふた緩斜面の農業部落てある。

雄井峠　宮城野から仙石原へ行くには、從來村の西から急峻な小丘陵を越したものてあるが、兩三年前に新道が早川沿岸に開鑿せられた。そ

れは宮城野へ行く橋の處から右岸を通り、更に左岸に渡ることに造られた、その舊道が越して居る峠が碓井峠といふ。日本武尊東征の砌、「吾妻はや」と宣はせられたのは、此處の碓井であるとは久米博士の說である。それは古事記によると、足柄から甲斐信濃へと渉られた道順から考へて、此處に碓井といふ名の處があれば、足柄は此邊一帶の地名で（今も全體足柄郡）あるから、當時の通路は此處であつたろうといはれるのであるがよくは分らぬ。

五、仙石原村

此の村は主として仙石原であつて、唯今仙石下湯に旅舍が一戸あるのと、湖尻の處に漁家が一戸あるだけである。早川は湖尻から出て、北流して、此の村で急に屈折して、東南に向ふのである。その北流する處は細流であつて、逆川といつて居る。仙石原の東南に至つて次第に激流となるが、元來長日月に河道は幾多の變遷を經過したと見えて、所々に蝕削した山を殘して居る。その中で宮城野から來る間に、小塚山の北で河岸が懸崖となつた處を過ぎた邊で、河と道とが相挾む小山の如きものがあつて、水蝕山の明瞭なものがある。尚ほ逆川附近に行くと、模型の如き水蝕丘は幾つもある。

逆川

水蝕山

仙石原

仙石原　仙石原の部落は、宮城野から一里強で、所謂仙石の平原の東北隅にある。農を以て立つて、山林を兼業として居る。此の地は箱根の峻の西北の要路に當つて居る、村の東方には關所の址があつて、本關の裏の番所である。こゝから南へ行けば蘆ノ湖を經て箱根へ行く、北へは金時山の麓を酒匂の流域に出る。西へは峠を越えて駿河へ出る。かく箱根山中では最も奥底であるが、山村の生計は比較的安穩なもので、戸數

七十に足らず、人口は五百に足らないながらに、小學校もあれば、補習學校もあつて、それが又却々行届いて居るといふ評判である。南方一帶は耕地や草原で、仙石原牧場は此處にある、此の平原は廣い處は半里もある、狹くても十町位ある。廣い所は一里からもあるが、これが學術上でいふ火口原で、もと蘆ノ湖のやうな水溜りであつたのが、全く乾いたのである。滿地の嫩草を含んで居る牧牛馬は、附近の景に興趣を添へる。この仙石原村に屬する地で、說明すべき個所が頗る多い、大涌谷、乙女峠等がその最も有名なるものである。

大涌谷　大湧谷は又大地獄といふ小涌谷の處で書いた通りに、明治六年頃から雅名を用ふる事となつたのである。先づ此處に來るには、凡そ五六條の道がある。通例は宮城野から仙石原に行く道を廿町餘計り行つた處から、左へ上つて十町餘で、仙石下の湯、次で又十町位、これが通例

大涌谷

の順路の如くてあるが、仙石原からが却々急峻てある。多くの人が通るには、強羅から大地獄山の山腹を通つて廿町位て行く事が出來る、是が最も捷路てあらう。第三が湯の花澤から一里位の山道、第四が仙石原から山道を仙石上の湯へ通つて行く一里十餘町、第五が湖尻又は湖畔の道から、姥子を通つて此處から凡そ半里である。大概の人は強羅から行つて、姥子の方へ通り抜ける。又乙女越するには、仙石から是へ來るのである。扨て大涌谷は箱根最後の活動をした處であつて、詳細は平林學士の火山の研究に詳說せられてあるから、實地の概況だけを記さう。この地は箱根火山の痕跡を今に殘して居る所で、火山の景色がこゝて見られのであるから、箱根に遊ぶ者は、是非一遊の値がある。宮城野から仙石へ行く道から、神山の北面の支峰冠岳の山腹を見ると、白く見える、近く此の地に來て見ると、全體を一目に見る事が出來ない、滿地赭白の小丘や、小溪

谷が縦横に起伏して、山頂の方へは黝暗色の大崩れが谷へ續いて、下方の谷は此處から推し出された砂礫の溪谷となつて居る。小谷の底やら、丘の腹やら、此處彼處に敷へられぬ程硫氣や、水蒸氣が噴騰して、沸々轟轟一歩を過つと、地獄の底かと思はれる。併しながら歩んで見ると、憂ひた程でもない、轟々の音のする方に立ち寄ると、沸々と熱湯が湧えかへつて、それから滾々と湧出する熱湯が見える。徐ろに其の近傍を視察すると、湯の花は美しく結晶してをる、試みに指を觸れて取ろうとすると、忽然として崩壊し去る。傍を熟視すると、雪白色の大小の塊をなした白石がある。是れは安山岩の分解したもので、球形又は塊形となつて剝落する、多少黄色又は赭色のものには、硫黄と混合したのもある。更に谷間を登り行くと、日光に映じて銀白色の光を放つものがある。放射形の固形物で、強く觸れたらグワラリと碎けて木狀の片々となる。是れなん

沈澱して生じた石膏の結晶である。噴出せる硫氣孔の附近を、精細に注目すると、一二分の美麗な硫黄の結晶が無數に簇生して居る。最も甚しい轟々の音を尋ね行くと、それは人工を加へた湯壺であつて、百八十度の高溫を有する溫泉で、それを仙石下湯へと引用するのである。丘の高みに立つて大體を觀望すると、其の音響、其の噴氣、其の山腹の崩壊の狀、壯觀を極めて凄い氣味に打たるゝ樣である。少しても出水した時には、大小の岩石轉々流出して、雨以前とは狀況を異にするのである。年年此に往來するに、全く舊知の地點を見出すに苦しむ位である。其の凄絶の場處は、宮城野から行つた方に甚しい。宮城野方面から姥子の方面、卽ち東北から西南へ横斷するには、丘を越え谷を渡つて數町で峠の處に到るが、そこまで道といふ程の道はない、峠に行くと小屋がある、少しく西南に目を注ぐとそこにも小屋がある、是は硫黄採取の爲めに建てゝ

箱根

あるのである。仰いて南方を見ると、崩れた谷を見上げる、頂きは冠の如くに衝つ立つて居る、形から名が現はれた冠岳である。神山の一部であるが、神山よりは名がよく知れて居る。その麓近くから鐵索を以て物を運搬して、此の小屋の處に來て居る。それは硫黄を採集して居るのである。此處の硫黄採掘は、餘程以前からやつて居るが、混合物の多いのと、產出量が餘り多からぬので、時々斷續する樣である。今は冠山の麓て、通路からは小溪谷を隔てた處のを採つて居る。峠から續いた北方の小溪谷は、末が小川となつて早川に注いて居る。谷に沿ふて十數町下りると、仙石下湯の溫泉場である。更に北方を見ると、二つの小山がある。北の方が臺ヶ岳、西北のが小塚山である。さて冠岳と此の二つの小山との間が即ち大涌谷の爆裂した中心で、神山の山腹を破壞した大活劇の爲めに、此の三山が出來たので、言ひ換へると、此の三山は爆裂口の火口壁の殘

つたものと見てよいのである。現在の噴氣は其の餘勢である、それ程恐しい活劇舞臺に拘らず、此の峠の上に立つて西の方を眺めると、富士の高峰が出現して、此處方數町の大地獄にあるを忘れる景色である。附近の小笹や、雜木林や草原となつて、續いては灌木喬木の林となり、更に臺ヶ谷や、小塚山の楢や、ついじは初夏の新綠中秋の紅葉、一入の趣がある風景てある。峠の眺を顧みつゝ、僅かに西に下ると、又沸々の聲がして、一面に塗つた漆喰土間狀の處を發見する。是は分解した岩石と、硫黄との混合である。足を擧げて踏むと、洞窟の上に在る如き音がして、時には踏み込む危險もある。此處や彼處の噴氣孔は、沸々の音のみで、湯は殆んど見えぬ。孔の邊には硫黄などの泥火山狀に見えるのもある、南の方は崖になつて小溪流がある。此處は洪水の流れることが少いので、大體に年々變化することが少ない。これから道は雜木林中に這入つて、姥

仙石湯

峠の數々

乙女峠

子の方に下つてゆく。大涌谷の案内は、是れて止めるが、箱根山の視察は此處まて來ねば、堂奥に入らぬものてある仙石湯は宮城野から仙石へ行く新道から行くのが便利てある、硫黄泉て上湯と下湯とあるが、今は下湯の石村といふ旅舍一つてある。

乙女峠　仙石原から箱根山外に通ずる道は幾つもある、北へ行くのは酒匂の流域足柄上郡へ出る。その峠がノゾキ峠て、西北の方へ行くと竹の下や、御殿場の方へ行くので、乙女峠の南方には長尾峠があり、又その南には湖尻峠がある。何れも駿東郡に通ずる道てある。その中て最も有名なのは乙女峠てあつて、道も最も良く出來て居る。此の峠へ行くには、村を通り切つて、十町も茅や雜草の原を行くと、追々道が急になつて、峠にかゝる。さて火口内壁てあるから、隨分勾配が急て、三十度乃至四十度もある處がある。道は曲折蛇行して十町餘りて、三千三百尺の

絶頂てある。上つて行つた向ふ、即ち西方には有名な乙女峠の富士が展開する。御殿場や山北やて見た富士の全景は、好いには相違ないが、裾が全部瞰中に入らぬから、到底此處に及ばない。此の頂上に來て芙蓉の峯は益〻秀て、愈〻高く、天姿英風誠に壯嚴の極、秀麗の粹てある。裾野の擴がりは、北は道志山脈を掩ふてから、南駿河灣に浸つて居る。近い處を眺ると箱根と連つて裾合谷をなして居る、そこに點綴する一條の白線は、道が黄瀨の川水か、町や村や將た森や煙霞の中に隱見する。霞を縫つて行く汽車の煙は、空谷を破る汽笛の音に出沒するのてある。近く此方の尾や峰や、牧童樵夫が鎌を負ふて生た菅公を畫いて行く。畫の樣な中を辿つて行くと、御殿場へ約二里、此の畫の中を脫出した一大雪峰、雲上から覆ひ掛からん計りの姿である。田子の浦、西の湖、何れ芙蓉峰の名所なれど、乙女の富士は確かに超絶的てある。說明の及ぶ處てない

仙石原村

から、實見に如かずである。

六、箱根町外二ケ村組合

是は箱根町と元箱根村と蘆の湯村とであつて、其の面積が頗る廣くて、蘆ノ湖は元より中央丘の中でも、下双子が湯本の分に入つて居るだけで、大部分が此の村内である。

姥子　大涌谷から十三町、仙石原から一里半弱、元箱根から一里三十町、蘆の湯村に屬して居る。一戸五棟の湯屋で、秀明館（西村）と稱するのがある。閑靜なことは比類ない。唯、中央の交通機關から離れて居て、車の不便が缺點であるが、徒歩主義の經濟的には此上ない。駿州方面の田舎などからも、近いのと輕便なとて、多く集つて來る。湯は稀薄な鹽類泉で、微少の澁味があつて、多分に飲用すると下痢を來すが、無臭で以て頗る

清澄な湯である。岩間から湧出して居て、而かも湯壺の上からは細い乍らも湯瀧となつて垂下する。溫度も適度であるから、頭上から打たれるのも佳い、湯壺は自然の儘の湯槽で、底の岩石が明瞭に見え、淺い清流に這入いた樣である。湯屋の敷地は赤褐色の集塊岩で、多量の赤鐵礦や、褐鐵鑛を含んで居る。此の石や土の塊中に木葉の形を印痕したものを見ることが多い、殊に湯壺の邊やその背後の邊から多く出る。之を木葉石といつて居るが、地質時代の標準化石といふ程古い植物でなく、多く現在する楢の葉の類であるが、併し一寸珍である。

湖尻　姥子から神山泥流の坂道を十五町下ると、湖畔の一漁家を見出す。元箱根や箱根町へ渡るには、此處から乘船するのである。それから湖畔の道を西北に行つて、逆川を渡り、それから西南に濱を行くこと、半里位で峠になるが、それは湖尻峠であるから、これを行かないで、尚

ほ細い小道づたひに四五町行くと、陸岸は西から東へ突き出て、僅かな入江となつた處に、一の水閘を見出すのである。此の水閘に入つた水は直に隧道となつて、峠の下を拔いて、駿東郡深良村の方へ十一町の延長で、それから湖尻川となるのである。此の疏水は深良村の新田を灌漑する目的で、寛文八年八月に着手して、江戸の商買四人の請負で、湖水を距る四十六間の處から掘り初め、一方駿東郡の方面からも掘つて、同じ十一年四月に竣成した。二百五十年の昔、凡ての技術や道具の不完全な時代に、人夫一日一人八十文積つて八千兩を費したといふ。相模風土記に竹橋余筆の文を引用して居る處を見ると、四月十三日に湖水掘拔願御厨領新田請負、江戸の商人四人の連名を載せ、新田成就の上十五分一下さるべき由とあるが、何しろ能くも成就した事と感服の外はない。此の閘門を冬は落して、夏は開き、湖水面の上下によつて調節し、加減するのである。これが湖水の量に影響するので、數年前には神奈川縣と靜岡縣との爭となつた事もある。詳しくは蘆ノ湖の研究に見える。

湖畔の道　湖畔の道は、湖尻の水門の側、即ち西側にもあるが、極く細い山道である。之に反して東岸即ち姥子から下りて來た道は、仙石から元箱根へ通つて居る。可なり廣い極平坦な道路である。それに又湖畔二里に足りない此の道は、神山の支峯の新宮山の麓から、諸佛山や駒ヶ岳やの麓を通つて行く間、眞逆道遙といふ譯にも行かぬが、山麓の篠原の間に近來御料局の殖林が著しく成効して、杉の林が見え出して、湖岸の景を添へて來た。所々に役員の住宅が結ばれて、中には別莊の如きものも建てられてあるから、以前とは違つて、大に單調でなくなつた。殊に富士や湖岸の變化して行く風景の中に、切り取つた篠竹は、竹行李や圖扇の材料となつて、輸送せられて居る。

箱根神社

姥子から來れば、無論境内を通るが　正面からは畑宿から來ても權現坂を上ると、直くである、蘆の湯から來ても畑宿から來た道へ出會ふて元箱根へ着く、着く前から社頭の森が見える。箱根町からは並木を越えて鳥居の前へ出る。社格は縣社であるが、近く三島から鎌倉までの間の有名な神社である。元箱根から三町許り湖邊を西へ行くと境内である。更に數百の石階を辷り行くと、如何にも神さびた別乾坤、地域六萬坪。祭神は瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花咲耶姫の三柱である。緣起を繹ねると、頗る古くて、孝昭天皇の御宇とも、武内宿禰の創建ともいふが、社傳によると天平寶字元年萬卷上人といふが勸請したといふ、延暦二十年田村將軍征東の時、矢を獻じたり、弘法大師巡錫の砌大伽藍を營み、嵯峨、鳥羽兩朝の奉幣があつたり、長寛二年に別當行實社壇を再興したと傳へて居るが、治承四年頼朝石橋山下に敗戰し、當社に隱れ別當行實に倚つた事は、疑もない事實であるから、當時既に有力な神社であつたに相違ない。大庭景親西走に當つて、草摺を切つて奉つたと盛衰記にあるが、敵も味方も信仰の厚かつたものと見える。養和二年頼朝參拜し、斯くて源家の武士は勿論、後白河法皇御不豫の祈禱をなさしめられた事も東鑑に見えて、年年の奉幣祈請は絶えなかつたのである。建仁二年早川の庄を割いて、百四十餘町の田地を寄附せられ、頼朝の參拜三度、實朝の如きは八度に及んだといふ。安貞二年十月不幸回祿に罹つて、社頭僧坊殘りなく燒亡したが、北條泰時造營を行つた。以來信仰參拜祈請變りなく、鎌倉管領の時代も亦同じく、後北條氏に至つては、永正十六年に四千餘貫の地を寄附したを始めとして、氏綱の時大永三年六月神社僧坊を新造したのである。天正十八年小田原征伐の時、兵燹に罹つて、再び堂宇以下烏有になつたのである。德川氏が關東を領するに至つて、文祿三年伊豆田方郡澤地村二百石を寄

別當金剛院の址

附し、更に慶長十七年十一月社頭以下の再造を成就した。現在のは、その後寛文七年九月の造營あつて、更に元祿十年五月に新造したものに、寛政四、明和六、享和二、文政十一數回修理したものである。例年八月一日二日に祭禮を行つて、近郷の子女群集して、頗る雜鬧する。瓦屋朱塗の社殿が霧藻の下がつた古木の森に相映じて、古色蒼然欽仰に堪えない。數百年の巨樹鬱々として、甚なほ闇き社頭、唐門の奥に鎮座して、瑞垣の外尙ほ塀を圍らしてある。德川時代には本地堂だの、鐘樓だの、神佛混合の社殿堂院が數多くあつたのであるが、維新以來其の大部分が廢墟となつて、今は其の位置さへ分明ならぬのがある。就中有名なは別當金剛院であつた。箱根山東福寺といつて、眞言宗であつたが、其の位置は石階の上り際の左手今の杉林中である。本堂や、金堂や、寺域も隨分廣かつたらしいが、維新の際に全く亡びて、寺寶併せて神社の寶物となつたのである。其の

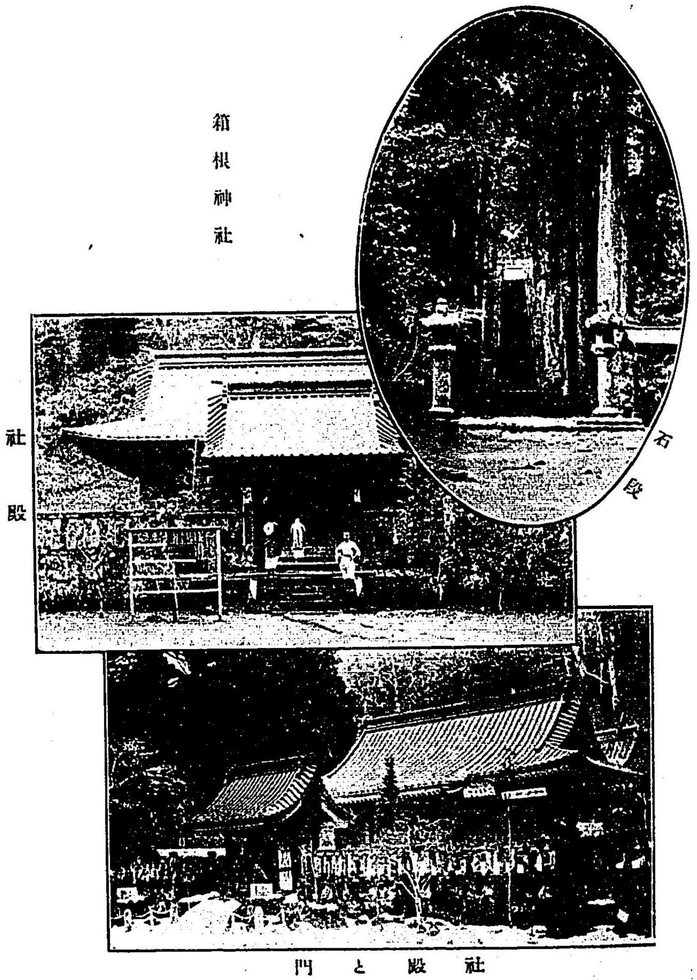
寶物

緣起を以て見ると、或は神社よりも古いかも知れぬ。萬卷上人は中興開山となつて居る。箱根神社が箱根權現で通つて居る、賴朝が便り來つた行實、永實、兩僧や、大庭に內通した良暹等僧侶許り史上に現はれてゐる、往時本地垂迹說流行の世に、神社の隆盛であつたのは、卽ち寺院の勢力が隆盛であつたことを想像せられるのである。此等神社佛閣の傳來古物寶物は其の數が頗る多いが、其の中の重要なものを擧げると、

箱根山領分之書(永正十六己卯四月廿八日宗瑞菊壽丸宛)一通○太閤禁制(天正十八、四月日朱印伊豆國箱根家門前以下三條)一通○北條氏殺生禁斷狀(辛酉三月九日)一通○曾我兄弟由緣記(撰者金剛院六十世隆照筆者成島仙麓寛政四五月廿八日)一冊○同敵討給入假名書一冊○大石內藏助金錢請拂帳(元祿十五、十一月落合與左衞門宛)○秀吉の文書(七月十二日まんどころ殿てんかとあり)二通○奥州秀衡の披露狀(末ニ八月朔日秀衡佐藤庄司宛)一通○曾我五郎時致の書(三月十三日)一通○北條氏康書狀(七月朔日金剛王院御坊御中)一通○光源院義輝書狀(五月廿六日箱根別當宛)一通○道永書狀(五月十二日)一通○義教書狀(八月廿八日)一通○道哲書狀(三月廿八日)一通○織田信長書狀(元龜二、十、九)一通○康長書狀(三月十九日)一通康長書狀(三月廿一日)一通○別所豐後守書狀(七月廿八日)一通○道永書狀(十月五日)一通○

大石内藏之助書狀(丁二月十三日)一通○端書(年月日筆者不詳)四十二通○棟札三枚(1大永三六、十二氏綱書判)(2慶長十七、十一、十三家康)(3元祿七、五、十八征夷大將軍内大臣)○扁額(享和元、三、二從四位下右近衞少將藤原朝臣某敦)一枚○曾我兄弟木像(坐像丈一尺五寸位)二○鏡(圓形作者松邨因幡守重量元祿七、六)一個○鏡(圓形寛文七、九、六)一個○鏡(圓形無銘尼將軍寄附といふ)一個○劔七口(1安部國眞作嵯峨帝寄附)(2木曾義仲重寶微塵丸ト號、嫡子清水冠者寄附祐成裾野敵討の時別當行賓之を祐成に與ふ後幕府より更に寄附)(3源氏の重寶薄綠曾我兄弟敵討の時之を時致に與ふ)(4康繼於越前作之松平三河守忠直寄附)(5無銘森伯耆守寄附)(6三州高力住長吉作寛文二、三寄附)(7安政四、五寄附無銘)○古鞘二○鰐二○赤木短刀一○陶笛(賴朝寄附)一○生月磬一○兜(尾州住春日沼野吉左衞門尉義信明暦三丙申二月十一日)一○人丸像(木、頓阿法師作)一○櫛(1尼將軍寄附(金))(2同斷(木))○香合(流金、橘の香合と稱す)一○矢之根石一○石牙一○泡浮玉一○九穴貝一○牛之玉一○馬之玉一○鹿之玉一○銕釜(弘安六、五の銘あり)一○同上(文永五、十一、十二の銘あり)一

蘆ノ湖　は別に田中子爵の講述があるから、略しておくが、通俗的概說と附近の二三の名所を書いておかう。湖の形については別名を鑁字の池といふが、その名は當つて居るか如何かは知らぬが、大體は瓢形をして居る。その蔓首即ち口の處が北方で、火口瀨で以て早川となつて居る。元



箱根神社

社殿と門

霞ノ湖の三景

多田滿仲の墓

賽之河原の石地藏

曾我兄弟及び虎御前の墓

と流れて居たといふ須雲川の方は、要害山や双子山で全く限られて居る。湖面の最長南北て一里半、東西は廣さも半里に過ぎない、周回すると四里半に餘る。湖水の景は中禪寺や西湖に及ばないまでも、東海道の名勝たるを失はない、東からでも西からでも峠に上つて、天然の鏡に接した人は、誰か絶景を叫ばないものがあらう。實に宗祇が箱根山の頂に水海あり言語道斷及がたき地景なりといひ、昔から詩歌に詠ぜられたものも多く實に眺望無雙の地てある。神社の前の象ヶ鼻の白川の津、權現坂を下りた處から次の並木にかゝる間の賽の河原の邊の相模の津等、沿岸に七津がある。南東からは堂島半島が突出して、綠葉紅花の間に和洋の莊麗雅趣ある建築が見える。此は是れ離宮であつて、御邸内の拜觀の榮を辱ふしたときは尚更、外から拜觀しただけても、龍宮に近づいた感がする。七津五名木の沿岸の探勝もさることながら、寧ろ赤壁賦中の人となる。

るのが最良案である。湖尻からでも箱根からでも船便がある、賃錢は遠近と船子員數とによるが、近くは四五十錢、湖上一周二人、船子でも一圓八十錢（一船の客員は十人（但外國人は五人）を投ずると、縦横に探勝の目的を達し得られる。中央丘は言はずもがな、蘆ノ湖第一の景と稱せらるゝ逆さ富士、羽化登仙はせずとも、舷を叩くの快他に勝るものやある。風の烈しい日や、霧の深い日には、四邊の眺望も掩はれ、或は波が高くて面白からぬから、快晴を撰ぶがよい、湖底の最深地は、東南部にあつて、五十丈もあるが、大抵は二三十丈、沿岸には頗る淺い處もある。湖中處々に木材が亂立傾倒して居る處もある。湖底淺い處を見ると、赤腹（アカハラ）の游泳するのを見るが、御料地である上に、近年鱒の養殖を行はれ、漁夫は許可を受けて業に從つて居る。垂絲の樂を享けんとするには、漁夫を雇ふに限る。古來此の湖上に泛舟の樂を縦にした例は澤山あらうが、東鑑文

應元年十一月廿八日の條に「御奉幣箱根山ニ參徒等湖上ニ浮船、延年垂髪翔廻雪之袖謳歌舞之曲云々」とあるのを以て代表として置かう。

元箱根村　人口二百五十の一寒村往昔は神社の附屬地であつたから、其の沿革は古いものであろう。德川氏が箱根驛を創成するまでは、峠の要所であつたが、驛宿の方が盛になると、此方は參拜專門の地となつた。斯くて神社と終始して居たが、今も旅客の投宿用意はなくて、淋しい樣に見えるが、村是宜しきを得て、共有財産を以て平日の公租曾て徵收したことがない。村の財政上、縣内秀拔なのみでなく、漁業に、挽物細工に、生活の主業を怠らないから、太平の樂み實に縣下の模範村である。夏は避暑の客が來るので箱根町へ行く道には西洋造の松坂屋（ホテルあり村には橋本屋を始め、二三の旅舍がある。村の南端鳥居の處から東北に上ると、畑宿に行く舊道で、村内の中央から北に上ると、蘆ノ湖に行く、尤

も此の道から右へ岐れても畑宿へ行くやうになつて居る。蘆の湯への道中には双子山の南麓に蒋の池があり、双子の西麓駒ヶ岳の間には精進池がある。何れも噴出物の堤堰で、出來た水溜りに過ぎない。元箱根や蘆の湯へ行く、この邊には多くの佛像や、供養墓がある。最も有名なのを數へ上げると、元箱根の南端には賽の河原といつて、多くの地藏の像がある。精進池の北側には、多田滿仲墓、曾我兄弟及び大磯の虎の墓があり、附近の大岩には廿五菩薩の像（三體は立像）が彫つてある。久米博士の説によると、こゝは箱根神社の奥院で、曾我兄弟は初から箱根の別當には非常なる恩顧を蒙つてをつたのであるから、別當が兄弟の屍骸を葬つてやつたとして不思議はあるまい、元來兄弟の墓といふものは御殿場にも曾我山にも方々にあるが、吾妻鏡でみるとその三七日に虎御前が箱根の別當に頼んで供養をしてもらつたといふ事があるから、假令實際屍骸がこゝに葬られたのでなくても當時の供養塔であると考へて差支がないやうである。虎御前は供養をしてもらつた後に髪を切つて信濃の善光寺へ往つた、この墓は又髪塚ともいふからこの髪を葬つたものであらう。尤も今の墓石は當時のものかは分らぬ、既に虎女の墓には元和六年云々とあるから後に建てたものなる事は明かである。多田滿仲墓はもとより誰か外の人の誤てあらうが臺石に武石四郎左衛門平寛政日光源氏女等の需により結緣の地として建てたやうな文句がある、蝕削されてよくは分らぬが正安二年の年號が見えるこれは鎌倉時代の年號であるから、全くその頃に出來たものであらう、實に立派な墓である。廿五菩薩は弘法大師の作と申すが、これはあてにならぬが、よほど面白いものである、岩腹に廿二體あつて他の三體は入口の向側の岩に刻んである。岩の形が雅致があつて面白いこれに銘があつて、永仁元年八月に當時の有志者が衆生尊利益の爲に

建てたものなる事が分る、或はこの年には鎌倉邊に地震があつたから死んだ人の爲に建てたものであらうといふ說もある。その外滿仲墓を距る半町往還の左側に高さ一丈餘の自然岩に彫むだ石地藏がある維新前は茅葺の堂があつて之を覆つてをつたが、今は全く濡佛である、その傍に古色掬すべき石燈籠がある、昔は六基あつたのが今は一基よりない。こゝは昔箱根の往還であつたのであるといふ說がある。久米博士の奥の院說も却々面白いと思ふ。

蘆の湯

蘆の湯　この地は小涌谷から舊道凡そ二十八町、新車道が一里五町。途中地尻といふ所に休憩所がある。この地は七湯で最高所であるが、八戸五十人に足らぬ所である、併し其の開創は甚だ古く、元は箱根社領であつたが、元文四年に分離したのである。舊幕時代にも五六戸の事もあつたが、文政の頃には人家櫛比したと書いてあるものもある、古道の一要

宿であつたには相違ない。溫泉は硫黃泉で、硫酸アンモニユームや硫化水素の臭氣がして、少々濁つて居るが、それだけ効驗も多いといふ。海上凡そ二千八百尺の地であるが、方數町の平坦地で、高燥宏濶、箱根東北半と相模洋とをつき通しの見晴し、酷暑堪へ難き炎天にも、涼風徐ろに吹き來つて、夏を知らず、蚊帳を吊らず、快言ふべからずである。冬季といへども駒岳は西北の風を掩ふて、寒風烈しからず、唯〻多少雪の多いので、來客稀少靜寂の境である。旅舍は紀の國屋と松坂屋の二戸である。紀の國屋は遊仙閣と號し三層樓で、結構頗る數寄を極めてをる。松坂屋は鶴鳴館と稱して客室多く庭園が廣くて和洋を兼ねて廣大な旅館である。附近探勝の地は山野である、阿字ヶ池の邊から、笛塚山、鷹巢山を始め、北方二三町を上つて、穗無平に行くと、競馬場がある。又二〻平に行く道の邊は氣持の可い散步區域である。土地高燥にして空氣の新

附近の臺地

鮮なる風物の爽快なる事比類なき土地である。温泉ばかりでなく四隣の景色も確に病を醫するに足る所である。

湯の花澤　蘆湯から五六町行くと、湯の花澤である、此處は駒岳山麓の谷間で、箱根温泉中の最高所である。硫黄氣多い温泉場、湯屋は唯一戸頗る閑靜である、仙望閣といふ。前面の小溪では、盛んに湯の花を採集する槽が並べてある。これを粉製して地方の人工藥湯にある材料を供給するのである、この所は眺望殊に開豁で、房總の山から東海道の宿驛等は眼下に見えて、最も爽快なる景色で、蘆湯の浴客が散歩に來るに適當な地である。

双子山　畑宿から峯に舊道を上つても、登れるが、上双子へは蘆の湯の南端から上るのが最も便利で、下双子へは蘆の池の西北からが良い。上双子は下双子より高くて、複雑に出來て居る。頂上迄大凡落葉樹と小笹とで

茂つて居る。峯は幾つにも分れて居て、重もなるものは四つある。分峯間の間は、四十メートルの深さで、谷に向つての傾斜は一層急勾配である。外側へ三十度位であるに、内側へは三十五度以上もあるから、如何にも火口と思はれる。上りつめた道は、三千五百尺の峯へと出る。峯から峯へと西南へ移り行く時は、道は全くなくなるが、小草の原であるから、造作なく進行がつゞけられ、行く先も分明である。此の間の處々に突出て地上に文やなした岩の邊を注意すると、幾千萬株の米躑躅いと愛らしく、一二寸の高さに苔の席の様である。雜木の間にも珍草の採收が出來る。殊に四季櫻は最も珍らしい。南面外側をすべり下りると、下双子へと續いて行ける谷合の小道を見出す、此の邊から湯本村内の畑宿に屬するのである。下双子も峰が三つに分れて、中央の平地は火口底の埋つた平坦なる草原で、石松や、米躑躅や、四季櫻や、日蔭蔓やが幾らても

ある。火口内へ登る一番樂なのは此の山であるが、頂上は上双子より百尺低きに拘らず、四十度近くの勾配の所もあつて、却々困難である。

駒岳　又駒形嶽といふ、頂上に駒形神社があつたといふ。登山の最も價値のあるのは、此の山である。山腹には東北の一部だけ雜木林があるのみで、其他は一切倭小の草山であるから、登りながら見晴しのよい事や、頂上から四方の眺望の都合のよい事も、遠方から此の山を眺めた形に於ても、其の鍾狀火山としての例にも、此の上に及ぶものがない。頂も亦四千三百尺といふ高峰であるから、四方の景の眸中に入る愉快さ、得も言はれね有樣、西を望むと富士の峰が手に屆かん計り近くて、一と飛に中腹以上に至らん心地がする。駿遠の赤石山脈から、甲信の諸高峰、大山、丹澤山から種々の山が手に取るやうに見え、その雲の空となつた末は、東南の海である。近く眼を谷間に下して、始めて我は斯る高地に居たのかと知るのである。此の山に上るには、東南側の精進湖の西から上るのが便利であるが、蘆の湯からでも上れる。此の山の麓の東側に茂つた支峰がある、南東のは死出の山といつて、上の平地に血の池といふのがある、正東にあるもの、卽ち蘆の湯の西上にあるのは本宮山で、頂きには湯泉の址がある。駒岳の支峰は少くないが、何れも双子山の如くに火口の谷を作つた處は全く缺けて、至極徐々に噴出したものが、全く火口を塞いだものと見え、中央丘中最後のものであるといふ事が分る。此の山で採收する有名な草木は、駒岳邊にある米躑躅と、初夏の候に楢や、何かの樹木の下に愛らしい小花を開く小岩櫻である。

神山

神山は中央丘中の最高峰である、蘆の湯が既に二千八百尺で、純粹の落葉樹帶であるから、風物自ら異つて居るに、況んや更に二千尺近くを登るのであるから、蘆の湯から湯の花澤を越して、神山道に入ると、次第に

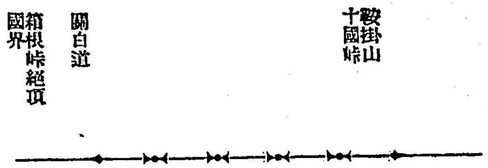
珍草奇木が增加して、同一の植物も頗る形狀を異にするのである、高山の例として、雲や、霧やが常に被覆して、眺望を缺く事少からねが、晴間に見ゆる四方の景、駒岳のそれに同じく、三角點の邊に立つた時の愉快は、得も言はれぬ次第である。唯、駒岳と異なつて居るのは、頂上迄灌木の繁茂して居る事である、その樹間に幾多の草木の採收すべきがある、併して箱根山中の魁たる四千七百尺の神山も、案外登山の容易なるに驚く、神山の西南には新宮山や、諸佛山の支峰があつて、駒岳と並んで蘆湖に裾を浸して居る。

箱根關所址　元箱根から賽の河原を通つて、杉並木に入つて約五丁を行くと、離宮の前に出る。再び並木に入つて又四町、此間頗る幽寂の感が起る。フウランや、セッコクや、ツタウルシや、キリモやの下がつた、何百年と分らない大木の間、天日を見ない幽邃は、數十步の外の東は篠竹、灌木の柴山とは思はれない。此の柴山は卽ち要害山で、數步の西は湖水の崖て、一碧崖を浸して居るのである。一夫之を守れば百敵をも防ぐに足る處。所謂函谷關も啻ならぬ天下の嶮とは此の地である。誠や關所が此の邊に置かれた事、並木が盡きて箱根町に入らんとする際、仔細に兩側を注視すると、石壘の遺址、萬年の苔を宿して居る。萬馬蹶天際、叱關人作群と、昔は曉六ッから暮の六ッまでのみ、開かれた門であるから、同行の人士と雖も後れて到ると、六ッの鐘が鳴うものなら、其の音と共に關せられた。已むを得ず關門の閾に停立して、追ふて來るを待つといふ珍事も演ぜられた。關所の起原は頗る古いが、此の地に設けたらしく見えるのは、鎌倉時代からであるが、其の位置も此所ではなく目的も遠つてゐたやうである、詳しくは箱根の歷史に見える。その、最も多く世に聞えるのは德川時代のである。江戸幕府が天下を有するに當つて

箱　根

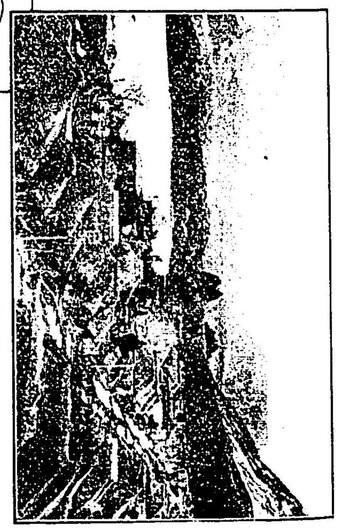
は、幾何と東國との關係、諸侯制御の方策から、東海道に多大の注意を拂ひ、尚更夫人を質とするには、關所の取締を嚴重にせなければならない事となつた。多く數ある關所の中、箱根を以て最とする。關所といへば箱根、箱根といへば關所であつて、何人と雖も誰何を免れぬ、最嚴最酷の關所であつた。通行手形がなければ金輪さい首と取りかへてなければ通れぬ。此の關所の預り人は、德川氏譜代の重臣、小田原の大久保侯であつて、關所役人交替で毎日見張つたのである。今に垣や礎石等が殘つて居て、建築物の大體の位置形狀が、今でも考定する事が出來る。道の兩側に舍營したのであるが、湖水の側の建物の庭木であつた松が、餘り大きくもないが、一本だけ殘つて居る、之を見返り松といふ。當時幾多の喜劇や悲劇をこゝて見たと思へば誠に今昔の感に堪へない思がする。

箱根町　此町の成立は德川時代であるが、その以前にも箱根は通路の一つであつたに間違ないのであるから、何處かに宿があつたに相違ない。延曆の古には何處を通つたか。乙女峠や、長尾峠などから、湖畔を通つて双子山の北に出たのが古道で、當時の宿である蘆川の宿といふのは、今の元箱根の地であらうと思ふ。されば此宿は全く新に德川氏の初に開かれたので、始はまづ元和四年であらう。この時松平正綱が命を受けて山野を拓き、三島、小田原兩町民を遷して新驛を作つた。それで、今に三島町、小田原町等の字が殘つてをる。勿論一筋町で、百戸足らず六百人の街村を成して居るのみである。三島へも、小田原へも、各〻殆んど四里足らずである。今は東海道の往還は皆足柄北方の鐵道で行くやうになつて、交通の要衝たる影はなくなつて全く德川幕府の運命と盛衰を一つにしたのであるが、聖代の賜は死命を制して活路を開いた。漁業や挽物細工やは勿論、湖上遊覽者殊に夏時の觀光新綠紅葉の眺めに、紳士學生

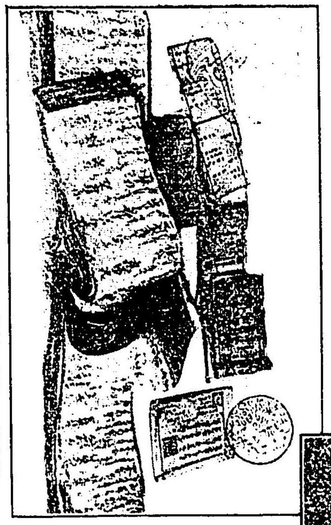


は固より駕籠に馬に車に貴婦人令孃までが樂に來れるやうになつて、漫遊の便が大に整ひ、清洒たるの旅舍は設備が大に行屆いてをる。附近の遊びは、湖上の樂を第一として、登山を以て之に亞ぐのである。

箱根町から中央丘への上りは極見易いが、今一つ案内したきは鞍掛山や十國峠である。町の南端から東南山道を上ること二十町で、鞍掛山の頂きである。それから先が十國峠の域に入る、近隣十ヶ國を眺望するといふのである、その道の先は湯ヶ原や熱海の日金山へ行くのである。町の中央から東へ上ると二十四五町で、左へ折れる細道を或は上り或は下つて、石垣山に通ずるのであるが、是は豐太閤が石垣山占領の節通つたといふ關白道である。本道を西南に二三町で上り坂となつて、十町足らずで箱根峠の絶頂である。鎌倉時代、足利時代、殊に新田足利の戰場、北條早雲の侵入、二千八百八十尺の絶頂は、將に史上幾變遷を經過した處



箱の宿根箱



帳宿るあ名の助之藏内石大るせ藏所に館旅の宿根箱

である。駿遠の諸山から、太平洋の海波を觀望することが出來て、大に、詩想を養ふ料となるやうである。

箱根町内にある旅舍は、はふや・石内・山木屋・遠州屋・大村屋・たちばなや等がある。（覽話箱根三卷）この中ではふやは箱根ホテルといつて湖涯に層樓を築きて湖水の風景を雙眸の中に集めるやうに出來てをる。西洋人のこゝに避暑する者が多く、西洋風の設備も行屆いてをるやうである。石内は舊本陣であつて、古い家柄である、徳川時代の大小名や名士の投宿した事歴が頗る多くて、元祿以來の宿帳も保存され、當時の本陣の立札から關所の手形判鑑等の今に傳はつてあるものが多く部屋の構などすべて昔の儘であつて、當時の模樣が想像せられて趣味津々なるものがある。殊に面白いのは宿帳に大石良雄が通過した時の茶代を書いた帳面や朝鮮人の通行の時の記錄など色々のものがある、その外當時歴歴の諸大名の名が、この

家の宿帳に記載されて殘つてをるのは實に面白い感がする。其外古い家であるから歷史上有益なものを多く所藏してをる。又遠州屋も古い家柄でやはり湖水に面して景色がよい。この地には町役場もあれば、郵便電信局電話所もある。

甘酒茶屋　箱根町から元箱根に通つて、權現坂を上つて、双子山の南麓に來ると、方數町に開けた臺地に來るが、此處は甘酒茶屋の跡である。滿地に繁茂した茅萱や、小笹や、虎尾枝やの間に、路傍に點存せる礎石が二三町の間見えて、兩側に並列した茶店の址だと直ちに感ぜられるのである。そこから急坂を下ること十四五町で、一本の榎がある。是は力餅の茶屋で、今でも辻小屋に一老媼がアン餅を賣つて居る。散歩の空腹には、喉を鳴らさゞるを得ぬ。正面崖下が山椒魚の名産の溪流で、須雲川の侵蝕の著しいのを現はして居るが、春秋の風色は頗る掬すべきものがある。

七、箱根の外輪

外輪山は次の樣に各郡に跨がつて居る、この中には外輪山のつゞき峯を書き上げると。

足柄下郡	鞍掛山	鍛冶屋山	屋敷山	要害山	鷹巢山	聖岳	石垣山	塔ヶ峯	明星山
足柄上郡	明星山	明神山	金時山						
駿東郡	金時山	長尾山	乙女峠	長尾峠	湖尻峠	三國山	山伏峠		
田方郡	箱根峠	鞍掛山							

右の中で、既に説明したものもあり、又大同小異であつて一々説明の要のないのが多い。例令ば、駿東郡に屬する多くの峠のやうなものである。著しい山と、其の山腹や山麓にある著名な二三を書けば充分であると思ふ。

明神山　箱根の外輪

明神山は外輪山中の巨峯であるが、國府津驛から見ると一

番手前に見える。頂上は三千八百尺、狩野山とも、塚原山ともいふが、其の山腹に道了權現のあるので有名である。寺は大雄山最乘寺といふ、曹洞宗で關東の巨刹である、山麓の關本から二十八町、(實は十四五町)、沿道には老檜巨杉幾百年の大木は、枝葉繁茂して晝猶ほ闇く、人里に遠くないのであるが、深山幽谷に入つた心地、幽邃の極天狗棲めりと傳ふは、強ち無理ではない。遠く俗界を離れて、山氣膚を射るの趣、開山は慧明上人了庵と號する人、應永元年此の山を開くに際して、一偉人の指導によつたと傳へて居る。了庵の徒弟に道了といふ僧があつて、頗る怪力を現して功勞多大なるものがあつたが、經營成就の後、天狗となつて守護すといふのである。今大雄山講中と稱して、商賈農民の崇敬頗る厚く、各地から參拜するもの引きも切らずといふ有樣、正、五、九月の二十七八日の大祭に、其の參拜者山上から山麓に續いて居る。登口二町で仁王門、

道了權現

それから一町毎の立石や茶店が廿八町の間に點在し、表門、覺王殿、梵鐘堂、多寶塔、大慈院、道了薩埵の堂、奥院寺、素朴な莊重な建築毎に道了薩埵の堂及びその背面の人物稚兒の彫刻は、實に精巧なものである。凡ての點に於て、近く數里内に於て比類ないものである。小田原から山麓まで二里半、此の間處々に史蹟があり、關本から西北には足柄峠があり、その道中に矢倉澤の貝化石の産地もある、明神山の南方峯續きは明星山や、塔ヶ峯である。

金時山

金時山　金時山は外輪山中の最高峯で、四千尺を拔いて居る。その山頂は樹木蓊鬱と茂つて居て、箱根外輪中他の赭山であるのに、亦群を脱して居る。それであるから、山中に猿の居るのは此の山だけであるなどゝいつて居る。乙女峠からでも足柄峠からでも上れる。植物界では白鬚草があるといふので、知られて居る。遠方から見て頂が黑く且つ尖つて居

るから、能く知れる。國府津驛から見ると、矢倉岳と明神山との間に聳えて居る。此の山麓が竹ノ下である、尾づたひに足柄山を下りると竹の下や小山へ行くのてある。

三島道　箱根峠の三島下りは全郡伊豆田方郡である、そうして亦其の大部が錦田村の中に屬するのてある。峠の頂の國縣界から三島まで約三里半、所々急峻の坂があつては、極少許の臺地がある。部落の數が五つ、何れも數十戸の街村て、多くは急坂に道に沿ふて建て居て、往昔驛路の休憩や、運輸やて生活して、傍ら山畑を拓いて居たのてあるが、世の變遷に捨てられて、唯山林乾畝の淋しい世渡をすることになつたので、實に憐むべき狀態を暴露しして居る。若し一度此處を通過すると、箱根舊道の細工物等の新しい生業をなして居るものと、差別あるのを見出すてあらう。群れ來る兒童が袖にすがることゝ、家並の模樣とは、往時の面

影を保存して居る。此の沿道に見晴しのよいといふ外に二つの說明すべき個條がある。

施行平　視界の平けた坂道を峠から下つて行くと、二つ目の平地は施行平といふ。四顧草原の中に茶店が一軒ある、いくら茶を呑み馬に水飲すとも、一厘の謝儀をも取らぬ。其の來歷を尋ねると、主人は徐ろに語るてあろう。今は昔し明治の六年に、我等が道の師たる遠藤先生は、性理の說、力行の議を懷いて、遠く下總香取郡長部村を風化した大原先生の遺塾を去つて、全國周遊の途に出た時、此處を通つて茶店に息ひ、施行平の名の因緣を聞きて、其の昔參覲交替の時人馬に施行をしたといふ來歷の跡を襲かんことを志とせられた、然るに其の年七月廿一日、江州石部の里に歿せられたから、明治十二年七回忌の砌、同志相計て醵金を以て、門徒各一數年の交替て、此の接待茶屋を開いて、既に三十年に相成りま

すと、話をしてをる、主人は髪を束ねて狩袴をはき往年小松宮殿下が來られたれども、一厘の茶料も頂戴せなかつたと大に得意である。

山中城址　峠絶頂から一里て、山中新田といふ部落、その西北坂下の村端、道の北側に城址がある。本丸、二九、三九の空濠の形狀が大凡皆な知る事が出來る。唯一丈許の小篠が一面に繁つて居るから、踏査は少し困難である。永祿十二年武田信玄が之を陷れた事もあり、天正十八年には松田間宮の兵が守つて、三月廿九日に落城したものである。此の山中新田の宗閑寺には、城主松田兵太重長及び間宮康俊の墓碑がある。又字水飲といふ處は、尊氏征伐の時義貞の陣した水飲の陣の位置であらうといふことである。

此處から笹原、三ッ谷、市山新田、塚原(初音)などの部落は、一面に敗きつめたる石疊の兩側に家居して居るが、塚原には、荒塚が澤山ある。

此處から道は三島まで平坦になるので、その一里間兩側に松杉の並木が絶間なく保存してある。その間に一里塚の榎もある。

聖ヶ岳　國府津小田原から見ると、箱根諸峯の最南方に當つて、富士型の小山巓を見るであらう。是が聖ヶ岳である。此の山の東側海岸は、崖濱であつて、十數個の曲汀をなして、片浦の風景を以て鳴つて居る。沿岸には石橋山古戰場があるし、根府川石の産地があるし、賴朝が安房に渡つた眞鶴の良港があるし、漁家農戶相斷續して居る。土肥實平の故地土肥鄕も此の邊である。聖ヶ岳の西南は、屋敷山や鍛冶屋山て、其の南方の溪流は千歲川といつて、伊豆と相模の境界である。沿岸の平地は土肥の根據地で、此處の堀之内の成願寺に實平一族の墓がある、輕便鐵道は小田原から此地を經て、熱海へ行つて居る。此の地の中心地は吉濱村といふ、吉濱の次の門川の處にある停車場は、湯ヶ原といふ。溫泉場は此

湯ヶ原

湯ヶ原温泉

處から川に沿ふて、一里足らずの上流に行くのである。

湯ヶ原　湯ヶ原は廣ヶ原(更に一里の上流地)と共に、爆裂火口であつて、箱根の寄生火山ともいふべきものである、併し山でなくて谷底である。その温泉場は實は宮上といふ部落である。此の地も全く足柄下郡に屬して居る、小田原から輕便鐵道下等五十一錢(上等九十三錢)で門川まで、それから人力車十五錢位で達する。

温泉は盛に湧出して、旅舍の如きも却々多くて、湯屋として有名なのは、中西屋・天野屋・上野屋・養神館・福住館・梅屋・湯屋・富士屋・伊藤・藤田屋・伊豆屋・函屋・杉本等である。泉質は塔の澤や宮の下などゝ、大差ない鹽類泉である。温度も百度から高いのは百七十度位、無味無臭の氣持のよい湯であるばかりでなく、旅舍が凡て普通旅客に適して居る上に、中西屋の如きは又上流にも佳いので、近來著名の士が多く來投するに至つたので

小修禪寺

公園

ある。此の温泉場の開けたのは、正史には見えぬが、頗る古いらしい。萬葉集相模國歌に「あしかりのとひのかふちにいづるゆの、よにもたゆたにころかいはなくに」、戰國時代に至つては、廣く知られて居たやうである。附近に散策の地や、探究すべき地は頗る多くて、日金山や十國峠まで行くまでもなく、片浦沿岸殊に近く、福浦の勝景が、往復の沿道にあるし、土肥鄕内に史蹟が幾つもある。温泉場は全體が甚だよく修禪寺に似て、風景がよし、氣候も湘南の優秀である、湯ヶ原入口見付の景色は、却々捨て難く、そこの河岸を南に渡つた千歲川右岸の公園は、新しいながらに見晴しが却々よい。これは明治三十七年東京の富豪川崎氏が、傷病兵慰藉の爲めに起した處である。温泉場から西方二町て、小瀑流清瀧がある、それから五町足らず川に沿ふて行くと、不動瀧がある。高さ五丈餘巾一間位、白龍攀登の趣き散策の好適地である。

箱根の外輪

八、箱根の物産

箱根の物産については、所々に說明し記載して來たから今一々詳述はしない、唯其名のみを擧げておく。

○湯本細工○硫黄○湯の花○木の葉石○自然薯○山椒魚○蛇骨○神代杉○自然薯煎餅○七湯湯たんぽ○湖水の魚○箱根草○宮城野蕎麥○山葵○簗○大平臺の巖○佐次兵衞柿○仙石原の玉蜀黍などがある、案内記、植物、動物、溫泉、湖水の各條に詳述してある。

箱根蘆ノ湖乘合船賃錢表

箱根及元箱根湖尻間	二人舟子	片道	一圓三十錢	往復	一圓十錢
	一人舟子		九十錢		一圓十錢
箱根町元箱根間	二人舟子		七十錢		九十錢
	一人舟子		四十錢		六十錢
湖內遊船	一時間	一人舟子	四十錢	二人舟子	七十錢
	二時間（以上一時間增每二）		六十錢		九十錢
			十錢ヅヽ增		廿錢ヅヽ增

一、一艘定員十名以內　外國人五名以內

二、屋根付船は定額以外三十錢增加

三、箱根町、元箱根村、湖尻に毎日定期（十二時、三時）發船あり

湯本停車場より各地への里程及賃金表

地名	里程	人力車賃		
塔の澤	五町	十二錢	箱根町	舊道二里廿三町 新道四里
宮の下	一里廿町	五十錢	堺子	四里
底倉	一里廿三町	五十錢	大涌谷	三里廿町
堂ヶ島	一里廿四町	五十五錢	仙石	三里八町
木賀	一里卅町	六十錢	乙女峠	四里十町
宮城野	一里卅四町	七十錢	三島	六里三十町
強羅	三里	上り九十錢 下り七十五錢	小田原	一里廿三町
小涌谷	二里十町	七十五錢	御殿場	六里半
蘆の湯	三里	九十五錢	蘆ノ湯より	

籠約一圓餘 車一圓十錢
籠約一圓餘 車一圓廿錢
一圓廿錢
車強羅迄 制定なし約一圓位（宮城野迄）
仙石より籠
舊道籠二圓三十五錢
電車三等十六錢
仙石より籠
往復一圓五十錢 片道一圓四十五錢
乙女峠へ 御殿場へ 三島へ 片道一圓四十錢

九、順路

一、交通幹線との關係　古來海道の重鎭と言はれた箱根足柄の要害は、たとひ一統鼓腹の御代となつた唯今でも、鐵道東海線は地を潛つて通らねばならぬ。關東ベイの質實と關西オマスの輕快とを分水して、東西文化の別流を餘義なくするのであるが、十九世紀文明の物質的勢力は、遂に東西の士人をして此の地に融合せしむるから面白い。今は將た所謂文明に疲れた者も、文明に憧れる者も、日に月に足を容るゝに後れざらんことを努むるに至つた時代の趨勢は、益〻坐邊に案内者を侍せしめざるを得ないのであるから、紳士、淑女、漁夫、農家が、或は清遊、或は保養、或は往復途次の一顧の爲めに、その路順を少しく案内の勞を取つて見やう。目的の如何によつて案内の方法も種別あるべきであるが、何れにし

ても國府津、三島、御殿場、小山等の東海道線の各驛から來ねばならぬ。これ等の各驛から箱根の各區の一部に達するには、近きは一時間遠くも四五時間で以て足りるのである、以上の各驛は何れも箱根の入口には相違ないが、國府津驛はその表門である、表から入るは正則であつて隨て最も便利で最も短時間である、殊に國府津は東海線上屈指の要驛であつて如何なる急行列車も此處に停車せぬことはない。そこになると御殿場や三島は急行は皆な通過するのである、凡ての設備や用足にも國府津は靜岡、沼津、横濱と對等である、それから又停車場に連接して箱根行の電車がある。途中小田原までの馬車がある。御殿場三島は是も亦全く缺けて居る、されば國府津から行くのが最も便利である。僅か一時間を費せば、海岸の風景を眺めて座しながら箱根の客となる事が出來るのである、併し乍ら頑健な双脚を以て徒歩主義の人には、御殿場からは富士山觀

望第一の風景があり。三島からは所謂箱根八里の舊本道て海道の古跡をたどる興味があるが、此の二方面共に三四里數時間の勞である。それから又三島から國府津までの汽車は時間にすれば二時間て僅に三十錢の差てある。して見ると通例なれば何處から來ても、國府津に下車するが順序要を得たものといはねばならぬ。て先づ表門から案內し始めやう。

二、國府津出發小田原經過　國府津驛前て箱根の概景を知るのは頗る便利て又必要てある。唯〻家屋に妨げられて、前後へ進退して見ねばならぬが、一步海岸に出るか或は後方丘地に近けば、汽車の窓越しに見し富士山は、西方に秀絕して千古の威風を示して居る。其の手前に當り突兀として連峯が遠く南の方海に向つて突き出て居る。是れが卽ち箱根山彙であつて、其の峯つゞきは漸く右の方に据を延べて次第に低くなつて居る。遂に北の方に、再び高くなつて居る此の山脈が、足柄山脈て、箱根山

箱根

衆の最も前面に近く且つ高く見ゆるのは明神山である。その左方南に峯がつゞいて明星山塔ヶ峯があるし、少し南へ離れて聖ヶ岳がある。恰度明神山と聖ヶ岳との間に見えて居る諸峯は、右の方北から神山、駒ヶ岳、双子山であつて、十二湯の大部は此の谷間の絲滴り黄葉燃る處にある。若し海岸に足を進めると、箱根の南に海洋に延び出た處は、伊豆半島で、更に海中に二三の島嶼がある。其の最大なのは白煙を認めることが出來る。これ即ち大島の三原火山で、箱根の兄弟分である。寄せ來る波、通ふ舟、國府津の一休息も中々の風景である。二三の茶店があり、一二の宿舍があり、近來名の聞えた五郎の力餅も畳き邊の御買上になつたとも洩れ承る。此處が抑もの表門、湯本迄三等三十一錢（二等は二倍一等は三倍）の切符を買つたら、一時間で身は既に溫泉中の人である。新橋方面から來る人は、東海線上重要の驛で湯本へ直通の切符も賣れば、往復の切符も賣り、湯本、

酒匂川

小田原驛で亦鐵道との連絡切符を賣つて居る、手荷物も取扱ふのである、毎土曜日曜大祭日及び暑中休暇や新年には二割引である。

國府津から湯本迄の恰度半途に小田原がある。國府津小田原の中間には酒匂がある。酒匂村の端れには酒匂川が流れて其の橋上の眺望は亦格別である、上流を見ると河谷十萬石の田圃が開かれて、足柄山脈や、矢倉岳の頂を雲の中に、富士が拔いて居るし、少しく北へ振り返へると、丹澤山脈が甲州の諸峯に連續して、其の裾には第三紀の丘陵が西は松田から、東は大磯の方へと蜿蜒として、其の後には大山が三角錐に超然として居るなどは、下流の河口に寄せ來る波濤の彼方、渺漠たる相模洋の遙かに、三浦半島を打ち見渡した處と、相對照して頗る趣味がある景である。近く河中に鮎を釣るのを見たときは、幕府の時代に蓮臺で渡しをやつた事も思ひ浮べられるのである。兩岸の景や、沿道の松並木を見ては、治

箱根へ

小田原通過

承四年三浦義澄・大庭景親の滯陣も想像せられるし、三百諸侯參覲交替の行列も偲ばれるのである。網一色、山王の漁村を過ぎて、小溝の如き蘆子川を渡れば此處は小田原城で大森氏、後北條氏、大久保氏と順を追つて居城した本郭のあつた處である、電車停留場の前面にある松並木の西に盡きる處に見える堤防狀の殘片は後北條氏の外郭の遺物である。その南側の堤の上には一本の板がある、此は所謂五十三次の一里塚である。町內に入ると二千に近い商工漁家櫛立し、町外の附近に數多の史蹟もあり、優に一日の探究に餘りがあろう。電氣鐵道會社を發車して數分間右手を見つゝ行けば八ッ棟造りの外郎藥店があり、小田原名物の賣店もある、丘の上には閑院宮御別邸を始め海岸に至るまで數多の別莊が見え隱れして居る。板橋といふ市街狀の農村を過ぎると早川の沿岸に出る、是は箱根山中の全體の水を

石垣山

容れて海に注ぐのであるが、其の河口を電車の鐵道線上より眺める曙光は實に絶景である。其河口の對岸にある村落は避寒畧に最も適した早川村であり、村落の北側に近く續ける丘を見上ぐれば、雜林の間頂上に數本の松幹卓出したのがある。これが有名な石垣山で、天正十八年小田原征伐の時豐太閤の陣所である。往復四時間を費すと其の遺跡城址を實見することが出來る、早川村が山麓と海岸とに盡きたと見ゆる處は石橋山で、賴朝擧兵の古蹟である。今は漁村、採石場等に過ぎないが、此邊から、南方海岸は片浦と稱へて、山と海との相映じ相配合した勝景の地である。やがて電車は風祭といふ停車場で留る。

長興山

電車は河の岸に沿ふて行くのである、右方の山麓の松並木が恰度街道である。が、長興山といつて稻葉正則の建てた寺の跡が入生田（イリウダ）にあるし、一山崎といふ處は維新の際に伊庭八郎等の箱根の小戰爭があつた處であ

三枚橋

三島より

る。軌道は此邊で右岸に渡る、其邊に三枚橋といつて電車道に交叉した街道を繼ぐ橋があつて、それから街道は河の右岸に渡つて次第に軌道に離れて行く、數分ならずて軌道が再び河の左岸に渡つたら間もなく湯本停車場である、數十歩を以て河を渡れば此處が卽ち湯本溫泉場である。

三、三島出發　東海道線を西から來れば富士の東に擂鉢を平たくした樣な山が横つて、その南方が、ズット海の方に延びて居る。その擂鉢の分が箱根である。三島停車場に着いて二十餘丁、或は豆相線に乘り替へて次の停車場「みしままち」に下車するが、併し豆相鐵道は發車時間に甚だ間隔があるから沼津驛に下車して、此處から一里半の處に駿豆電氣鐵道を利用すると、十錢を要するのみであるから寧ろ此方が便利てある。沼津は人口一萬三千に過ぎないが、避暑地として別莊地として、東表の小田原と相對峙して居るのてある、三島は箱根峠の西口てある。三島町驛か

らは、西北に東海道に乘つて行くと三島大社の前に出る、町の端から峠まで道程四里弱、街道一面に一二尺の大石が敷詰めてある。數百萬人の足で磨けて、冬の凍つた日などはツルリ〳〵と辷るし、乾いた日には足を痛めるが、山道急勾配になるまで一里餘の間松並木、昔を偲ぶ一里塚、一度は通つて見る面白味がある。塚原、市山新田、三ッ谷、笹原を經て、山中新田に着く迄家の造り方や、小兒が旅人に物乞ふなど、凡て此處は舊幕時代のやうで現今の文明の日陰てある。山中新田に着くと左側に小丘がある、これ山中城址てある。此處から峠へ約一里殆んど登り盡せば施行平て左側に茶店一個、何人にも茶代を取らぬ施行特志の來歷が聞かれる。三島からの舊道は勞力は多いが、遠く駿遠の諸山から駿南の大洋を眺める快濶な道てある。峠を下りると間もなく見出すは箱根隨一の景、蘆ノ湖畔と中央諸丘でそこに箱根の宿がある。

四、御殿場出發

東海道線御殿場驛は、御殿場村の新橋村にある。停車場から軌道を踏切て、字相川次に東山新田の東南から村落を漸く離れて、裾野の松林に入つた頃からは、一本筋の除り廣からぬ道路となる。漸く上つて漸く急に、迂曲する邊試に後方を回顧すると、富士の壯大は上るに隨つて益壯大と威嚴とを加へ來る。二里弱で峠の絶頂に達した頃、富士觀望第一の名を得たる乙女峠がそれてある。唯一戸の茶店もなけれども、十丁下れば仙石原で喉を潤す事も出來る、最近にある溫泉場は此處から約一里の姥子である。

其他小山驛からも登れるが餘り便利でもない。細き山道てあるし、熱海から來れば有名な絶景十國峠をつたつて來られるが、却々困難な道てあるから、寧ろ海岸を小田原に來るが便利てある。して見ると國府津から小田原迄が最便最利てあつて三島、御殿場は之に次いて甲乙ないものてある。

一〇、保養地と衞生

一、箱根は如何なる種類の保養地であるか　我國は山水明媚の地が多くて、到る處に保養に適する地がある。或は土地高燥て空氣新鮮なる場所もあれば、氣候が溫暖で風光絶美の土地もある。夏なれば白沙青松の海濱て海に浴して快をとるのもよからうが、四時季節を擇ばず老幼壯弱を論ぜず保養をするに適當なるのは、寧ろ溫泉に勝るものがない、その溫泉も唯山中にある鑛物分が身體に有益なばかりてなく、四圍の狀態が精神に慰安を與へ快樂を與へるといふ事がなければならぬ。我國には到る處に溫泉が多いが、多くその境域が狹隘で、共に備はるべき精神に快樂を與ふる自然の風光が缺けてをる。然るに箱根は空氣は新鮮てあり地は高燥てあり、山中到る處に絶美なる風光があつて、間口が廣いのみならず

箱根

奥行も甚だ廣い。一日では一日の快を得られ、數日では數日の快が得られる。周圍の景色ばかりでも、この地に遊んでみれば自ら浮世の塵を去つて正に仙域に入つたやうな感がする。健全でない人も馬を驅り車を命じて、この美を探りこの幽を索むる事が出來て、さながら瑞西の山中に遊ぶの思が得られる、健脚の人は草鞋脚袢でアルプス登山の快をも得る事が出來る。斯くの如く山河の風色のみでも既に我國に冠絶した土地である。然るになほその上に溫泉が山中到る處に湧出する、その溫泉は唯、鹽類泉とか硫黄泉とかに限られて居るわけでなく、殆んどあらゆる種類の溫泉が完備してをる、鹽原の山水美は世に嘆稱せらるゝ所であるが、雄壯なる蘆ノ湖の美は見る事が出來ない。道後の溫泉は古來その名が高いが箱根に比しては、その湯量の多い事については、到底及ぶ所でない。しかのみならず、溫泉場として保養地として第一の條件たる交通の便利と

いふ事も備はつてをる、東京からも僅々三四時間で行く事の出來る便利な事は有馬の溫泉も及ばない。その上に海濱は指呼の間にあるからして、鮮魚は求めに隨つて得られる有樣で、山海の珍味は先づ大概は揃つて居る。されば箱根は保養地として、實に天下に冠絶した所といはねばならぬ。若しも冬季の寒冷を云爲するならば、それは箱根の冬景を知らぬからで、殊に閑靜を好む人には恰好である。誠に近來冬季の客が增加するといふが、雪の箱根の賦唱すべきものがあるからである。四五月頃の新綠垂らんばかりの風景は到底他に見られぬ好景である。夏の凉氣であるのは、溪谷の殆んど全部が、太陽の光を浴びる時間の少ない故である。オゾンが多いからか步々愉快の念が湧き出でる。浴後凉風に吹かれる心地は實に得もいはれず、積年の病も忽にして去るの趣がある。秋は滿山是れ紅葉である。楢や躑躅は黄ばみて晴れ渡る空漸く高くて絶好の眺め

箱根温泉

温泉場

である。誠に四季の美が悉くこゝに備はつてをるといつてよいのである。

二、温泉場の配布　日本國中の温泉が湧出する所は有名な場所だけでも數百ヶ所あつて悉皆は數へ切れない位であるが、大概な温泉場は湧出地が一ヶ所の狭い範圍に集つて居る、一里二里と隔つて幾ヶ所となく湧き出るなどは頗る珍らしい。殊に各同泉質であるのが通例であるから、草津は何、伊香保は何と、効能も殆ど一樣である、然るに箱根は四里許りの間に五町十町と隔つた彼處や此處に散在して、而かも異なつた泉質が特別な風景の處に在るので、如何なる種類の要求にも適應したのがある、今試みに表で以て示して見ると、

所在地	湯場名	泉質	所在地形	湯本停車場よりの距離
湯本村	湯本	單純泉	湯坂山麓早川沿岸	停車場所在地
塔の澤	鹽類泉	同上	同上	五町

219357

温泉村	宮の下	鹽類泉	淺間山麓早川岸崖斜面海面上千三百尺	一里廿一町
	底倉	同上	同上	一里廿三町
	堂ヶ島	單純泉	同山麓早川溪谷底	一里廿四町
	小涌谷	酸性泉	小涌谷麓斜面地海面上約二千尺	二　里
	木賀	鹽類泉	小涌谷山麓早川溪谷沿岸千三百尺	一里三十町
	宮城野村	强鹽酸性泉	早雲地獄山腹斜面地海面二千六百尺	(新道)二里廿五町
	仙石原村	仙石	早雲地獄山腹斜面地二千四百尺	三　里
	蘆の湯村	姥子	鹽類泉	神山山腹斜面三千尺	三里廿八町
		蘆の湯	硫黄泉	笛塚山頂駒岳山麓臺地二千八百尺	三　里
		湯の花澤	同上	駒岳山腹斜面地二千九百尺	三里八町

斯う一日で歩き切れない位い廣い範圍に、異種の温泉が十二湯の多くも湧出で、特殊の風景と効能とを提供して居るから、保養地として多衆の

要求に應ずる處は他に類例が少いことは斷言が出來る。

三、溫泉の性質及效能　溫泉の性質に就ては、別項の溫泉中に明かであるが內務省衞生局編纂の大日本鑛泉誌に就て見ると、其性分が明瞭に記載してある、尤も十二湯全部に亘つては居ないが、各種の一二に就て示したならば、他は類によつて推し測られるであらう。

泉質

溫泉場名	塔の澤	宮の下	底倉	木賀	蘆の湯	小涌谷	湯本
硫酸ナトリウム	0.0845	0.1350	0.0350	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
クロルナトリウム	0.1845	0.1350	0.0350	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
クロルカリウム	0.0010	0.1351	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
クロルマグネシウム	痕跡	0.1351	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
炭酸亞酸化鐵	痕跡	—	—	—	—	—	—
クロルカルシウム	0.0035	—	—	—	—	—	—
炭酸マグネシウム	痕跡	0.0351	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
硅酸	0.0510	—	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
有機物	痕跡	痕跡	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235
炭酸カルシューム	—	0.1351	0.0351	0.1325	0.0535	0.1035	0.1235

效能

溫泉場名	燐酸	硫酸カルシューム	硫化水素	炭酸酸化溝他	硫酸アンモニューム	硫酸鐵溝他	游離硫酸（一リットル中）固形物量
塔の澤	—	痕跡	—	—	—	—	0.2513
宮の下	—	痕跡	0.0031	0.0031	—	—	0.2513
底倉	—	—	0.0031	0.0031	—	—	0.2513
木賀	—	—	0.0031	痕跡	—	—	0.2513
蘆の湯	—	—	0.0031	痕跡	—	—	0.2513
小涌谷	—	—	0.0031	痕跡	—	—	0.2513
湯本	—	—	0.0031	痕跡	—	—	0.2513

性質分量が右の通りであるとすれば含有物の多少の相違によつて效能にも亦相違がなくてはならぬ、然し溫泉の效能が其の性分の如何を主とするのは勿論としても、精神の慰安を與ふる興趣がなくてはならぬ。それは設備にもよるし殊に風景や氣候や、地形上の如何が著大の關係を有することは世間の定說である。永い間に幾多の人士の經驗に依つて唱へられる效能はよくその實際を證明してをるわけであらう。今傳來の所說に

保養地と衞生

依つて効能を表示すれば

湯本　皮膚病、神經系病、精神病、痔、疝、腺及び水腫病、子宮病、胃腸病、

塔の澤、宮の下、堂ヶ島、底倉、木賀、姥子、　皮膚病、神經系病、脚氣病及諸關節病、諸膜炎、子宮病、諸生殖器病、眼病、

蘆の湯、湯の花澤　皮膚病、生殖器病、脚氣病、諸の加答兒、中毒、痔、多血症

小涌谷、強羅、仙石　皮膚病、貧血症、脚氣、痔、子宮及生殖器病、胃腸病

自然の配劑で以て効能は凡て大同小異であるとしても、蘆の湯や湯の花澤の様な硫黄泉の所は内臓病や神經病より寧ろ皮膚病に特効のあることは疑ひない。蘆の湯は高燥宏濶に於て他に及ぶ所がないが、一面に湯本や塔の澤には交通線から近くて便利であるといふ特色がある。小涌谷は酸性泉であるから、貧血性又は消化機の疾患によい。宮の下底倉木賀及びそれより上の小涌谷蘆の湯等は、凡て土地が高いから、温泉のみでなく避暑としても無類である。清淨な無臭無味の湯本塔の澤の如き湯は神經系の病によくて、幽邃なる風景はこの二地と堂ヶ島木賀に於て見られる。なほ何れの湯でも量の多いことは箱根の特長である。

四、入浴者心得　溫泉の効能至つて多大であるとしても、無暗に入浴するのは却て害があるから、平素攝養の調子や、醫師の注意によつて守るべき條項以外に次の様な個條に注意せねばならぬ。

第一、入浴時刻に注意せねばならぬ。一年中に考へては氣候溫暖の時

が最佳良の季節であるが、箱根の如きは大部分全年不適當と認むべき處はない、一日中では晨旦と就眠前が最も佳良で午食後はその次の入浴時である。

第二、入浴回數に注意せねばならぬ、一日中で以て見ると三回位が適度である。若し毎日過度に入浴すると眩暈やら發熱やらを起すことがある。それから又一回でも一時間が最長である。

湯治は先づ三週間位で切り上げて一二季節を去つて又入湯するが効能が多いといふことである。

第三、其他注意すべき事項を數則併べ記して見ると、

一、餘り高度な湯はよくない、時々變更するがよい。箱根には特別に高い、恰度身體に適してあるやうである。

（參考）　箱根諸湯溫度

湯本	一〇〇度	塔の澤	一〇五—一一三度
宮の下	一一四—一四〇度	堂ヶ島	一一八—一三三度
底倉	一四五—一六八度	木賀	一〇〇—一一三度
蘆の湯	九八—一〇七度	姥子	一一三度

二、適度に全身を摩擦しては浴槽に入りて暖め、數次繰り返へさねばならぬ。

三、入浴終りたるときは乾燥したネル又はタオルで濕氣を充分に拭ひ取らねばならぬ。

四、入浴後は暫時靜穩に休養せねばならぬ、過度の運動や、勞役や、興奮する樣な事や、感情を激發するやうな事はしてならぬ。

五、溫泉の水は飲用する事が行はれるが、鹽類泉や單純泉は害にならぬ、或は少量は効能がある。殊に便通によいといふことであるが、一日に三合を超過してはならぬ、時刻によつて又善し惡しが

箱根

ある、一般に効があるといふのは朝夕の空腹の時である。若し飲用した後は徐々と運緩な運動をするのがよい。

五、氣候及び温泉場以外の保養地　箱根の氣候は亦頗る保養に適良である。湯本の如き冬は小田原よりも却て暖かい、小田原が大磯より良くて逗子と伯仲の間であるが、湯本は決して之に劣らぬ箱根山内に入ると稍冬季の温度が下がるが、それでも蘆ノ湖の近邊でさへ宮古、山形などより暖かくて、夏は金華山位の涼しさである。今之を表にすると次の如くである。（温度華氏）

地名	年平均温度	平均最高（七八月）	絶對最高（七八月）	平均最低（一二月）	絶對最低（一二月）
小田原	五八度	七七度	九三度	三九度	一八度
湯本	五八	七六	九二	四一	一九
箱根	五〇	七〇	八八	三二	一〇

湯本や塔の澤は山に圍まれて冬暖かに夏涼しい、多くの點に於て箱根は保養に適して居る。殊に蘆ノ湖畔の避暑と來ては日光の中禪寺湖畔の類である。空氣は頗る清鮮で涼氣膚に迫るなどいふ外に風景の美がある。舟游の便がある、漁夫を雇へば釣も出來る。閑靜に至つては世俗を離れて文明の襲來は旅館の設備と同好者の會するのみである、扨又海濱に至つては小田原があり、早川がある、恰好な清遊地が少くないが、山中に於て紹介すべきは卽ち此處である。

六、清遊の方法　特別の疾病があるでなく、よし多少虛弱なにしても、強て療治する必要もないといふ人が、一日數日の清遊を試みたり、或は俗塵煩累の彙集する中に埋もれて、半日の慰藉も安閑として貪れないといふ文明社會に奔馳する人や、老いたるに至らざる迄も、又世塵に汚されないでよい人などが、數日の旅行を企て、世外に起臥し、精神の修養や、

箱根

身體の安靜などをするには、海濱の遊びよりも溫泉の樂みは實に凡ての洗濯である。併し其の淸遊の方法にも唯〻散步と湯沐の快を得るだけでは、一日二日は退屈にもならぬが、三四日又は一週日と永くなるにつれて、慰藉の方法と愉快を採るの便宜とを撰擇せねばなるまい。碁、將棊や、玉突や、大弓や何れにしても普通の方法もあり、便利もあるが、最も利益があつて、最も愉快な方法は探勝であると思ふ。碁や玉突等面白くはあるが、箱根でなくとも天下到る處に之を貪ることが出來る。箱根の美、山水の勝に到つては、天上天下唯〻それ箱根のみである。天然の景を喫して旅舍に歸り、一浴の後、弓に遊び玉に戲るゝも亦快ならずとせずである。然らば探勝の方法は果して如何、最も便利で案內の入らぬ道は、早川沿岸の大道を上下するのである。湯本から宮城野まで、是は箱根溪谷の景色の粹である、九十九回り迂餘屈折、步々に變化する兩岸の景や、

細流や、飛泉が瀑となる所や、さては湍潭碧をなす所や、峽を隔てゝ富士の峯をチラと見たり、瀧木の間、喬木の茂り、赭裸の草山等を縫ふて翻る百千鳥、岩間苔の上に見ゆる珍花、名草、特別に探究するでなくとも、是等諸般の配合は箱根自然の景を作つて居る。別道を通つて舊海道を須雲川に沿ふて上下しても殆んど類似の樂みがある。或は史蹟を探究しても此の沿道に少からぬ興味の種を發見するであろう。早雲寺があり、舊海道がある、或は明星、塔ヶ峰、淺間、明神、湯坂から、中央諸山に登るのも却々の興味がある。若しくは大涌谷の噴氣孔を見たり、仙石原の牧畜を觀察するもよし、蘆湖畔に出てゝは逆ヶ富士、權現社頭、關所址、古今に亘り、山水に關はつて諸多の方面に趣味湧くが如くであろう。何れも溫泉場から一日の行程である、半日を費さぬ處もある。誠に洗湯は身體を淸かにして健康を得るし、探勝は精神を洗濯して健全を得られる、

清遊の方法は之に增したものはないと思ふ。

七、保養の費用　保養を希望すると同時に、費用を計算するのは中流士女に取つて必要な計りでなく、上流の金錢に關係なき方面に於ても、持參すべき多寡の調査上必要である、今普通人士を標準として概略の費途を記述して置くのは決して無用でないと思ふ。

温泉場と温泉場でないとに關はらず、大凡同一であるが、先づ一泊壹圓五拾錢位で、一日弐圓位ならば結構な方で、一泊壹圓又は七八拾錢から、最上等三圓乃至拾圓以上のもある、此最上位は西洋人向專門の富士屋や、高等紳士の奈良屋などであるが、それでも事と品とによつては增減が出來るやうである。尤も何れも季節によつて三割位上下する、冬が最安直で、夏が最高直である、湯本や、塔の澤は四季餘り變りがないが、宮の下から上へ登る程夏季に高く冬季に安い、それで大凡中等冬壹圓、夏

壹圓五拾錢の一泊、尚は五拾錢乃至七拾錢位である。これはまづ並以下でこれより贅澤をしやうと思へばいくらでも出來る。萬般の品は都會に居るのと變らぬやうに何等の不便を感ぜぬやうに出來て居る。この外に永く滯留する人の爲めに伺ひといふのがある、三度調理すべき食物を客に問ひ合せて、嗜好に應じて調へるのである。又宿によつては必要の物品を買つてこれは宿屋から室を借りて自炊する事も出來る、それはその人の好みと必需の量とによつて安くても高くてもなる、又食物に好惡のある人には至極便利である。それて一室を數人にて借り、凡てを自炊すれば比較的安價となるのである。この自炊又は伺ひてやるのは、家族携帶永滯留の人に適當の方法である。伺ひの方は大抵の宿屋でやるやうてある。併し唯一人又は二人が清遊旁ては、矢張り通例の旅宿扱を受けるのが便利であろう。此の樣子であるから極々普通なれば茶代の外

一人一週間に拾五圓も費せば十分であらう。序に言つて置くのは茶代廢止を實行して居る旅館は、湯本の福住と底倉の蔦屋とである。近頃はどの宿屋も勉强して設備を完全にし、最も衞生に注意し、且諸事輕便にして、浴客を安穩に滯留せしむるやうに骨を折つてをる。

それから道中に要するのは、三等並賃金として示すと、新橋國府津間が七拾九錢、國府津湯本間電車が參拾壹錢、湯本から塔の澤登りは拾錢か拾貳錢であるが、假りに宮の下とすると五拾錢の人力車賃である、車の嫌な人には往昔用ひた樣な駕籠があつて、一人宛人夫二人と助手一人との筈であるが、人力車は二人挽であるから二人分、駕籠は三人分である、湯本から箱根湖水を見やうと思ふから、壹圓乃至壹圓貳參拾錢となる、委細は表にして前に記してあります。人力車で壹圓貳拾錢である、人は、

一一、旅行の心得

一、如何なる研究資料があるか　凡そ修學旅行といふものが、自然物を直接に研究の對象としたり、或は資料を史蹟遺物に採つたり、又は自然と人間の交涉の結果によつて現はれた點を觀察するのであるが、大概な處はその一方に傾いて居て二つ以上を兼ねた處は少いに、況して精神上の愉快の外に、身體上の慰勞を得る例は極少い。箱根は是等を兼ね有して居る。そこで先づ箱根に於て得られる資材の要點を列べ擧げて見ると、

一、箱根は二重火山の絕好の標本である。是と同時に火山噴出の變遷に伴ふ地形の變化のみでなく蔦ノ湖があり流水の浸蝕の著しい早川や須雲川の溪谷がある、卽ち地文地質の研究資料が澤山ある。

博物
史蹟
風光
人事

二、次に博物學の研究資料である。それは一つは植物景の垂直變化であるが、一つは動物學上珍らしい山椒魚が住んで居る。植物にも珍草がある。

三、史蹟としては山麓にある小田原が關東の覇府であつた以來、德川氏を通して第一の要害であつた關所や、海道や、是れ等に關係した古跡、遺物がある。

四、自然の勝景も、美術家としてゞなく美感の修養に必要である、溪谷の景や、湖畔の風光や、山頂の眺望や、前記三項の探究に副へて得られる。

五、若し又人情風俗が交通系統の發達した中心から離れて居る處に異なつた樣子があるとすれば、箱根の一部には確かに古風が殘つて居る。若し又水力による發電所や、火口原や、火口瀦に人類の生活するのを

見れば、自然と人間との交涉を知ることが出來る。斯の通り修學に利益があつて、そうして又滾々として盡きぬ溫泉に一日の勞を慰することが出來、食膳には相模灘の鮮魚や、湖水の淡水魚に舌鼓うつ事が出來るなどは、直接目的以外に結構な獲物がある理である。

二、觀察の順序と其の方法　其の目的の如何によつて一樣ではないが、普通に中學生などのやる程度を以てするならば、全般に亘つた概觀を試みるのであるから、國府津から小田原まで來る間に箱根の構造の一斑を眺望することが出來る。西から來る時には、鈴川・沼津邊から概觀するのであるが、是は峠まで上らねば充分には分らぬ、東から入るには既に汽車の窓からでも二重火山の說明が出來る。小田原を通つて早川の沿岸に近よれば、双子山と外輪山との峽間が益〻明瞭になる、斯うして箱根に到着して、扨て其の觀察を實地に進めるのである。そこで一日に

箱根

通過するのと、滯留して調査するのと、自然と精粗の別があるが、順路には大した相違はないのである。先づ通常行り易い順路と里數とを示して見よう。

第一線は箱根の要所を一巡するものである、湯本を出發して早川に沿ふて、塔の澤・宮の下・底倉・木賀・宮城野・强羅・大涌谷・姥子の各地を回つて、湖畔の道を箱根に出て、權現社參拜關所址へ一寸立寄り、舊海道を畑・須雲川から湯本早雲寺に歸着するに、此の行程が約九里ある。此の通過する所は主要な溫泉は大凡通るし、大涌谷の噴煙や、湖畔海道の風景、史蹟を尋ね盡すから、一巡するには最良の線路である。若し東京其他から、汽車時間の都合で二日に亘るとすれば、底倉邊で一泊するもよい、又丁寧に二日を費すとすれば、姥子の湯瀧に打たれゝのも又面白い、湖上を舟て箱根町へ渡るのは殊に愉快である。

乙女越

第二線は横斷である、これには二線がある、一つは、三島から舊海道を通過するのである。往昔の雲助の通つた、或は大名の行列した跡を辿るのには一種の趣味がないでもないが、比較的平凡なものである。然し史蹟は大凡見盡すことが出來る。此の行程は三島・湯本間が約七里弱尤も此の線を中央の權現社前からして新道を通れば、蘆ノ湯・小涌谷から底倉以下の早川畔に出て、第一線に合して湯本に來るのであるが、行程は迂回によつて少し延びて八里を越えるのである。

次の線は乙女峠を越へて御殿場に向ふのである。第一線を宮城野から岐れるか、又は姥子から岐れて、仙石原から乙女峠に上るので、御殿場・湯本間が六里餘ある大涌谷へ廻ると一里餘り遠くなる。是は却々面白い順路であつて、汽車から汽車へ一日の餘裕で通過するには、最良の線である。乙女峠の富士といへば江尻の富士よりも壯大で、田子浦